

# 韋君宜と『文芸学習』について

## 楠原俊代

はじめに	115
I 『文芸学習』の内容	117
II 「正統な教条主義者」から「右傾」へ	120
III 「双百」と『文芸学習』	123
IV 反右派闘争と『文芸学習』	128
おわりに	143

### はじめに

---

韋君宜（1917-2002）は、1953年中国新民主主義青年団中央宣伝部副部長、兼団中央機関誌『中国青年』総編集から北京市文化委員会副書記を経て、中国作家協会に移り、月刊誌『文芸学習』の創刊準備をおこない、作家協会党組成員となる。翌年『文芸学習』が創刊され、韋君宜は主編となる。この『文芸学習』について、韋君宜は1986年1月、「憶『文芸学習』」<sup>(1)</sup>を書き、「私の編集者としての生涯の中で、足に昔の銃弾が入ったままで、傷口はとうに癒えてはいるものの、ちょっとぶつけるとまだ少し痛むようなもの」であり、本誌が廃刊となったことを「思い出すといつも平静ではいられない」と述べている。本誌の廃刊については、「この青年から、大変歓迎され、販売部数が30数万にも達した（当時これは大変な数字であった）<sup>(2)</sup> 雑誌は反右派闘争に呼応して多くの批判と自己批判の文章を發表した後、密かに幕を閉じた。終刊の理由を述べることもなく、終刊の辞もなく——もともと何の理由も無かったからである」、「われわれが心血を注いでやってきたこの小さな雑誌は、何の理由もなく終結を宣言された」と言う。

それでは、『文芸学習』とはどのような雑誌であったのか。本誌についての解説は、手

元の事典やインターネット上で見つけられなかった。『中国大百科全書・中国文学』<sup>(3)</sup>にも、『文芸報』の項目はあっても、『文芸学習』は無い。陳文新主編『中国文学編年史・当代卷』（湖南人民出版社、2006年）には、以下のように記されていて、「廃刊」の文字は無い。

1954年4月27日 中国作家協会編集の文芸普及雑誌『文芸学習』が創刊される。本誌の主要な任務は、「広範な青年に文学教育をおこない、文学知識を普及させ、文学鑑賞能力を向上させ、文学隊伍の予備力を養成する」ことである<sup>(4)</sup>。創刊号には、唐克新の短編小説「我的師傅」が発表された。

1957年12月 今月『文芸学習』は『人民文学』に併合され、張天翼が『人民文学』主編、陳白塵・韋君宜・葛洛が副主編、艾蕪・周立波・呉組緇・袁水拍・趙樹理等9人が編集委員となった。

実質的に『文芸学習』副主編であった<sup>(5)</sup>黄秋耘（1918-2001）は、彼の回想録『風雨年華』増訂本で、『文芸学習』は1954年4月に創刊されてから1957年12月に停刊されるまでに計45期出版、每期48頁約8万字、印刷数は創刊号の12万部から増加し続け、40万部近くにも達し、毎月の投稿投書は1000通以上で、広範な青年読者に歓迎されたことが知られる、と述べている。黄秋耘によれば、反右派闘争で右派分子とされたのは、全国で55万余人、大多数が知識分子、当時の知識分子の総数は500万人に過ぎず、ほぼ1割が右派とされたことになる。この結果、いくつかの雑誌、たとえば『文芸学習』『新觀察』などは停刊するしかなかった。なんとか刊行し続けた雑誌もあったが、中国作家協会主管の主要雑誌『人民文学』『文芸報』は編集者が不足して、質が著しく低下し、発行部数も『文芸報』は18万部から12万部、3分の1ほども減少した、という<sup>(6)</sup>。『人民文学』がどれだけ減少したかはわからないが、1955年12月秦兆陽が『人民文学』常務副主編に就任してから1957年の上半期までで、『人民文学』の発行部数は2倍になり、10万部ほどから20余万部にまで増加した<sup>(7)</sup>。

最盛期には『文芸学習』の発行部数が、『人民文学』の2倍近く、『文芸報』のほぼ2倍か、それ以上あったわけであるから、韋君宜の言うように、これは大変な数字であった。それがまったく「何の理由もなく」廃刊となったとは、どういうことなのか。いったい何が批判されたのか。そしてそのことが、なぜ1986年には廃刊の理由とならないと韋君宜は言うのか。韋君宜は「双百」〔百花齊放・百家争鳴〕の方針と反右派闘争を通して中国革命とどう向き合い、どう生きたのか。本稿の目的は、韋君宜が『文芸学習』主編だった時期に絞って、韋君宜とその時代を明らかにしようとするものである。

## I 『文芸学習』の内容

韋君宜の前掲「憶『文芸学習』」によれば、『文芸学習』にはひとつの編集委員会とひとつの編集部があった。編集委員会は青年工作に熱心な作家（黄葉眠、蕭殷、李庚、彭慧、公木など）からなる。編集部は基本的にすべて青年で、30代が杜麦青、黄秋耘、楊覚と韋君宜の4人。その他の編集者はみな30歳以下で、全員これまで編集をしたことがなかった。彼らの新しいチームは、その場その場で人から習ってはそれを実行に移し、生まれたばかりの子牛が虎を恐れないように、意気込みは大きかった、という。

ただし、黄秋耘が実質的に『文芸学習』副主編であったとはいえ、『風雨年華』増訂本によれば、黄秋耘が新華社福建分社社長代理<sup>(8)</sup>から『文芸学習』編集部に移ったのは、1954年9月のことで、編集委員として彼の名前が掲載されるのも第6期（1954年9月27日出版）からである。また第2期までは、編集者として「中国作家協会文芸学習編集部」と記されているのみで、主編韋君宜と、黄葉眠・蕭殷ら編集委員の名前が明記されるようになったのは第3期からである。

それでは、『文芸学習』とはどのような雑誌であったのか。もう少し1986年1月の韋君宜の回想「憶『文芸学習』」によって見ていこう。韋君宜は次のように述べている<sup>(9)</sup>。

この雑誌は評論雑誌でもなく、創作雑誌でもなかった。文芸研究雑誌でも国語学習補習雑誌でもなかった。その名の通り、文芸学習としかいえないものであった。

教授や専門家に文学史をわかりやすく解説してもらって、連載した。王瑤の「中国詩歌史」、呉小如「中国小説史」、臧克家の「五四以来新詩」など。名著を紹介した文章が雑誌の主要なページを占めたが、中学教師が段落を追って「鑑賞分析」したり、アンソロジーの講義をするようなものではなかった。あまり原文を掲載することはなく、その概要を紹介しただけで、文学を学ぼうと思った読者には自分で本を探して、読んでもらった。このような「名著」の範囲は広く、古代から現代まで、中国のものも外国のものもすべてであった。

当時は、ソ連の『卓婭和舒拉的故事』〔コスモデミヤンスカヤ『ゾーヤとシューラ』〕、『普通一兵——馬特洛索夫』〔パーヴェル・ジュルバ『普通の一兵——アレクサンドル・マトロソフ』〕が流行っていて、ほとんどの青年が読んでいた（それはちょうど今の多くの中年が無限の懐かしさを抱く「純潔の50年代」のことである）。韋君宜らは文学を好む青年の視野を少し広くし、これらの本以外のものも知らせたいと考えた。そこでバルザックやチェーホフなどの小説といった西洋の19世紀の作品や、当代の創作『保衛延安』、ソ連の新しい作品『拖拉機站站長和総農芸師』〔ニコラーエワ『トラクターステーション所長

と主任農業技師』などを紹介した。

「視野を広める」とはいつでも、おのずと限界があり、基本的には文学常識の範囲内だった。狭すぎるよりも広い方がよい、考え方もひとつしかないより、活発な方がよいと考えたにすぎない。

『拖拉機站站長和総農芸師』と「組織部新来的年輕人」<sup>(10)</sup>〔組織部に新しく来た青年、以下「組織部」と略記〕の2編の作品について、読者による討論を組織した。目的は青年に問題について、前進中の祖国の抱える病に関心を持ち、ともに治療しようと、いろいろと考えてみてもらおうとしたに他ならない。青年がいつも「飴の缶」(50年代の青少年の生活に対して常に用いられた形容詞)の中で飴を食べているだけで、満足してもらいたくなかった。青年の状況を理解するために、全国に通信員網を組織した。大衆と連絡を取るために、北京通信員には映画上映会を開催した。作家を組織して、文学講座を主催し、チケットを無料で公開配布した。文学以外に美術作品も選んで掲載し、その作品の精妙な点について解説を書いてもらい、読者の芸術鑑賞力を高める一助にしようとした。さらには読者の座談会を何度も開いた。青年の習作も発表した。習作を掲載する小さな欄があり、まったく無名の青年投稿者の短編を発表し、評点を付けた。本誌に発表された習作を少し調べてみると、今では作家となった張天民、尚久驂、蘭珊などの作品が掲載されている。

韋君宜は述べている——われわれは雑誌をうまく編集しようと、倦まずたゆまず努力した。何人かの主要な責任者はかつてみな雑誌を編集したことがあり、それまでに、局長か処長クラスの地位にあった。しかしそのとき、われわれは仕事をはじめたばかりのときと同じように、毎号順番に錢糧胡同の印刷工場の校正室に出かけて、校正し、問題があればその場で解決した。こうして印刷工程を短縮した。いつも私と黄秋耘、王錫厚の3人でバスに揺られて行ったことを覚えている。みな疲れも知らずにこの作業を楽しんだ。「自分は作家になって本が書ける(あるいはもっと高い地位につける)、こんなことをしては前途の妨げになる」と言う者は誰もいなかった。われわれが心血を注いでやってきたこのささやかな雑誌は、まったく何の理由もなく終結を宣言された。

以上のように、韋君宜が「われわれが心血を注いでやってきた」と言うとおりの、『文芸学習』はただの「文芸普及雑誌」ではなかった。そして本誌は何の理由もなく廃刊となったのではなく、反右派闘争においては、「組織部」について読者の討論を組織したことや、祖国の抱える病に関心を持ち、いろいろと考えてみてもらおうとしたことが批判されたのである。韋君宜もこのとき「右傾」と批判されたが、『文芸学習』主編として最初から右傾だったわけではなかった。このことについては次章において述べる。

ここでは、黄秋耘が『文芸学習』創刊号巻頭の「発刊詞」を整理して、『文芸学習』の

工作は以下のような内容だったと記しているのを見ておこう<sup>(11)</sup>。

1. 読者が作品を正しく閲読し、鑑賞、理解し、作品の思想内容を深く理解し、作品を通して生活をよりよく認識し、より多くの教育を受けられるよう助ける。
2. わが国と外国の古典文学に関する知識を提供し、読者が段階をおって中外文化の伝統について正しい理解を得られるよう助け、広い範囲で文化的教養を高める。
3. 執筆についての知識を提供し、創作経験を紹介し、現実生活を反映した優れた習作を発表、紹介し、文芸の新しい苗〔才能ある新人〕の育成を助ける。
4. 文芸科学に関する知識を提供する。
5. 読者が関心を持つ文学作品の閲読と執筆についての問題に回答し、大きな普遍性を持った問題については、読者を組織して討論を行う。
6. 大衆の文学活動状況を報道し、読者が文学作品を学んで得た収穫と体得したことを発表する。

『文芸学習』創刊号では、巻頭の「発刊詞」の次に、当時、新民主主義青年団中央委書記処書記だった胡耀邦の「文芸作品是青年的老師和朋友」が掲載され、その後には、馮雪峰が魯迅の「藥」、臧克家が郭沫若の詩「地球、我的母親！」について解説を書くとともに、原文も付録として掲載されている。さらに穆木天がシェークスピア生誕390年を記念して書いた「莎士比亚和他的戲劇」を「文学知識」として掲載している。また韋君宜は、「問題討論」の欄で、読者からの投書「作品内容が自分の生活と直接関係がないのに読んで何の役に立つのか」を収録したうえで、「漫談怎樣讀文芸作品」を書き、自分の生活と直接関係がない作品、たとえば魯迅の作品や土地改革、抗戦について書かれた作品などに現実的意義はあるのかどうか、文学作品を閲読する目的は何か、などの問題について、各学校・工場・機関・部隊の文芸団体で討論を組織し、意見をまとめて送付してほしい、第2、3期に掲載する、と書いている。次号以降も、人民文学出版社から1954年6月に出版された杜鵬程著『保衛延安』〔第4期〕のような当代文学や、ソ連の文学作品を取り上げる一方で、第3期からは王瑤が執筆した『詩經』、『楚辭』、樂府詩、魏晉五言詩、唐詩などについての「文学知識」を連載している。『文芸学習』は、このように読者からの投書も掲載して問題提起する一方、一流の文学者や研究者が青年に向けて執筆した文章も掲載していた。当代文学から中外の古典まで網羅した、見事な編集方針だったといえるだろう。

## II 「正統な教条主義者」から「右傾」へ

韋君宜は『思痛録』の中で、『文芸学習』の編集を始めたころについて、「われわれの雑誌では一日中、ソ連でスターリン賞を受賞した『金星英雄』〔ババエフスキー『金星勲章の騎士』、1947-48年〕、『鋼与渣』〔ポポフ『鋼鉄と鉄屑』、1948年〕などの作品を紹介していた」、「私のような文芸の何たるものかも知らない者が、間もなく中国作家協会党組成員になるとは思いもしなかった」と記している<sup>(12)</sup>。『文芸学習』に、『金星英雄』『鋼与渣』について、朱子奇の「勇往直前的新社会的建設者（読『金星英雄』）」と賈霽の「答関於『鋼与渣』的幾個問題」が掲載されたのは、1954年第5期（8月27日出版）のことである。

韋君宜は、1979年に「心中的楷模——参加邵荃麟同志追悼会归来」の中でも、1953年青年団から作家協会に移ったとき35歳だった自分について、次のように記している<sup>(13)</sup>。

これまでに文学作品も読んでいたし、自分でも小説を書いていたが、〔1948年に〕青年団設立工作に参加して以来、業余文学への愛好をすべて放棄し、工作の必要に従って、書類や社説、青年の思想を分析する論文を書くことを学ばなければならなかった。文学については完全な「功利主義」に陥っていた<sup>(14)</sup>。われわれの青年雑誌は青年の思想問題を解決することを目的に発行されたものであり、当時の青年の思想に対して教育的な作用を発揮することができる文学作品なら、何でもわれわれは宣伝提唱した。同時に私自身も読んだ。たとえば『卓婭和舒拉的故事』『普通一兵』などの書物は、このために読んだ。われわれがしたことは、もちろん当時何の効果も無かったとは言えないし、その効果は確かに小さくはなかった。しかし私自身のそうした文学に対する興味は、それ以来、薄れていった。

韋君宜は同じ文章の中で、以上のような「文学主張」を「幼稚」なものとしたうえで、さらにつづけて『文芸学習』出版準備のための会議の席で、この「幼稚」な「文学主張」を持ち出して、ソ連の『鋼与渣』のような作品（スターリン賞2等を受賞、1等の作品はすべて紹介し終えていた）を紹介しなければならないと言ったことをおぼろげに記憶している。韋君宜が発言を終えるやいなや、馮雪峰同志は顔色を変え、大變腹を立てて、「なぜそんなものを！ われわれは青年のために文学雑誌を出すのだ、こんなことをしてよいのか」と言った<sup>(15)</sup>、と述べている。

馮雪峰（1903-1976）が韋君宜に立腹したことについて、韋君宜は1985年12月の「追念雪峰同志」でも書いていて、韋君宜が『文芸学習』で『鉞与渣』を紹介しようと提案した

とき、馮雪峰は鼻先でせせら笑って「そんなもの、何が文学なものか」と言ったことを覚えていて、それはまだ彼が右派とされる前のことだったという<sup>(16)</sup>。

黄秋耘が『文芸学習』編集部に移ったのは、1954年9月のことで、韋君宜の言っている会議と同じものではないだろうと思われるが、黄秋耘もまた、『文芸学習』で指導小組の会議を開いたとき、馮雪峰が韋君宜に、「君は『中国青年』の主編だった。今『文芸学習』を『中国青年』と同じように編集しようとしているが、そんなことはできない。それでは失敗するにきまっている。君は文芸というものをしっかりと勉強するべきだ」と説教をした、と述べている。黄秋耘は、これはつまり韋君宜が文芸をわかっていないから、韋君宜に「文芸というものをしっかりと勉強する」ように、と馮雪峰が言ったのだという<sup>(17)</sup>。

馮雪峰は、当時、中国作家協会副主席・人民文学出版社社長であった。韋君宜の提案は、馮雪峰から反対されても、『文芸学習』1954年第5期に、『金星英雄』『鋼与渣』についての文章は掲載された。まだ「自由」な議論ができる時期だったのであろう。

黄秋耘は、『文芸学習』主編時代の韋君宜について、「文芸の教育的意義と社会的効果を強調」し、最初のころは「徹頭徹尾、教条主義者だった」、それが後に、非正統な文芸思潮の影響を受けて、いくらか「非正統」になった、「正統な教条主義者」から当時「修正主義的傾向」と言われていたものになった、と述べている<sup>(18)</sup>。

韋君宜の教条主義者ぶりについて、黄秋耘は、以下のように言う——黄秋耘は、韋君宜に、ソ連の作家のなかで誰が好き、とたずねられて、アンドレーエフの「雨」が好きだと答えると、「そのような芸術鑑賞はよくない」「ポレヴォイを好むべきだ」。黄秋耘が、ポレヴォイの作品には何の芸術性もない、と言うと、韋君宜は批判して、「それは間違っている。劉白羽同志も含めてすべての指導同志がポレヴォイの作品を好んでいる、アンドレーエフが好きだなんて言う人はいない」と言われた。

黄秋耘は、このことから韋君宜の教条主義がどれほどひどいものであったかわかる、韋君宜はどのソ連の作家を好きかで線引きをする、アンドレーエフには小資産階級的情緒があるから、彼を好んではならない、ポレヴォイを好むべきだと言った、という。

それでは、韋君宜が「正統な教条主義者」からどうして「非正統」、当時「修正主義的傾向」と言われていたもの、すなわち「右傾」へと変わったのか、それはいつからなのか。

黄秋耘は、主としてソ連共産党第20回大会におけるフルシチョフの秘密報告を聞いたからだ、と言う<sup>(19)</sup>。それは1956年4月下旬のことで、作家協会内部では劉白羽が伝達した。その秘密報告の伝達はたいへんな機密で、一字も違えず、13級の処長以上の黨員幹部に伝達された。作家協会での伝達を聞くことができた者は10人ほど<sup>(20)</sup>しかいなかった。密室でドアを閉じて劉白羽が読み上げた。記録することも録音することも、部屋を出てか

ら、たがいの間で話をしたり議論をするのも許されなかった。秘密報告の伝達は午後2時から始まり、2、3時間続いて、夕食前によく終わった。その日の夜、黄秋耘は韋君宜の家を訪ねた。どちらも北京市委宿舎に住み、韋君宜の家は、黄秋耘の家の斜め向かいにあった。このとき、韋君宜はがまんできず泣きながら黄秋耘に「今日聞いたことは事実だと思う」とたずね、大変動揺して「これまで思ったこともなかった、共産党内部にこんなことが起きるなんて」と言った。この秘密報告の伝達を聞いてから、韋君宜は180度変わり、まるで別人のようになった、という。

その具体例として、黄秋耘は、『解放軍報』1957年3月号に掲載されたショーロホフの小説「一個人的遭遇」〔人間の運命〕を、『文芸学習』の同年第5、6期に転載し、この作品を称賛した評論、杜黎均の「論『一個人的遭遇』的創作特色」も同第5期に掲載したことをあげている。これは韋君宜の決定によるもので、黄秋耘は当時農村に行っていて関与していないという<sup>(21)</sup>。最初、韋君宜は「これは反ソ反共だ」と言って、転載に賛成しなかった。黄秋耘は「こんな風には言えないだろうか。ソ連の人民はみな幸福だとでもいうのか。苦痛はないのか。苦痛があれば作家として人民の苦痛を書くことは当然のことだ」と言った。黄秋耘はそれ以上何も言うことなく、その後、韋君宜は自分から進んで転載を決めた<sup>(22)</sup>。

『文芸学習』で王蒙の「組織部」の討論を組織したのは黄秋耘が提案した<sup>(23)</sup>。韋君宜も良い作品だと言ったが、最初は「でたらめな議論も出てくる」と、雑誌上で討論することには賛成しなかった。黄秋耘は「でたらめな意見も出てくるから皆で討論するのだ、よいことではないか」と言った。ソ連共産党第20回大会〔1956年2月〕の後だったから、韋君宜も誌上でこの討論を展開させたのだと言う<sup>(24)</sup>。

韋君宜自身は、『思痛録』の中で、「私は積極的に『組織部』に関する討論の手はずを整えた。これは毛主席の党中央の意見に従って事を進めているのであり、官僚主義に反対するのだ、と考えた。劉賓雁の「本報内部消息」〔『人民文学』1956年6月号〕、黄秋耘の「鏽損了靈魂的悲劇」〔魂を錆びつかせた悲劇、『文芸報』1956年第13号〕を読んで、私は本当に自分の魂が打ち震えるのを感じた」と記している<sup>(25)</sup>。

黄秋耘は、韋君宜の変化はその身の処し方にも現れたと言う。たとえば『北京日報』に戚学毅<sup>(26)</sup>という記者がいた。劉賓雁の親友で、当時劉賓雁はまだ右派にはなっていなかった。ちょうど劉賓雁の批判会の最中に、戚学毅は劉賓雁の反党の言行を暴くよう迫られ、ビルの5階から飛び降りて即死した。死の数日前、戚学毅は韋君宜に「黄秋耘の『鏽損了靈魂的悲劇』を読んだ、自分の魂を錆びつかせたくはない、錆ついた魂で生き続けても意味はない」と話していた。黄秋耘によれば、韋君宜は「なぜ正義感をもった青年が自殺に追い込まれなければならないのか。このような運動はあまり正しくないのでは」と嘆き悲

しみ、現実の中の多くの物事に疑問を抱き始めた、と言う。

韋君宜が「正統な教条主義者」から180度変わり、まるで別人のようになって、『文芸学習』で王蒙の「組織部」の討論を組織したのは毛主席の意見、すなわち「双百」の政策に従っておこなったものであり、反右派闘争がはじまると今度はそれが「右傾」として批判され、自己批判しなければならなくなった。

### Ⅲ 「双百」と『文芸学習』

---

『文芸学習』が、全45期、わずか3年9カ月で廃刊となったのは、反右派闘争で批判されたからである。主に陳文新主編『中国文学編年史・当代卷』によって「双百」から反右派闘争開始までの経緯を見ておこう。

1956年4月25日 中共中央政治局拡大会議で「論十大関係」の報告をした毛沢東は、報告についての討論で出された意見を受け入れ、同28日総括発言をおこない、「『百花齊放・百家争鳴』を、われわれの方針とすべきである、芸術問題においては百花齊放、科学問題においては百家争鳴を」と述べた。

1956年5月2日 毛沢東は最高国務会議で「双百」の方針を正式に公に打ち出し、「芸術においては百花齊放の方針が、学術においては百家争鳴の方針が、必要である」と述べた。

1956年5月26日 中共中央宣伝部部長の陸定一が、中南海懷仁堂で文芸界と科学界にむけて「百花齊放・百家争鳴」と題する報告をおこなう。『人民日報』に発表されたのは、同年6月13日。

1957年1月7日 『人民日報』に、陳其通・陳亜丁・馬寒冰・魯勒が連名で「我們对目前文芸工作的幾点意見」〔当面の文芸工作に対するわれわれの意見数点〕を発表し、1956年の「双百」方針に導かれた文芸工作に対して異議を唱えた。

1957年2月27日 毛沢東は最高国務会議第11次（拡大）会議で「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」の報告をおこない、「百花齊放・百家争鳴の方針は、芸術の発展と科学の進歩を促進する方針であり、わが国の社会主義文化の繁栄を促進する方針である」と指摘した。この報告は、加筆修正のうえ6月19日の『人民日報』に掲載された。

1957年3月12日 毛沢東は中国共産党全国宣伝工作会議で重要講話を発表し、「百花齊放・百家争鳴、これは基本的で同時に長期的な方針であり、一時的な方針ではな

い」と述べた。

1957年4月10日 『人民日報』が社説「継続放手，貫徹『百花齊放、百家争鳴』の方針」〔引き続き大胆に『百花齊放・百家争鳴』の方針を貫徹しよう〕を發表し、1月7日掲載の陳其通ら4人の文章を批判した。

1957年5月15日 毛沢東が「事情正在起變化」〔事は変化しつつある〕を書き、「双百」から反右派闘争への転換の準備を最初に指示する。<sup>(27)</sup>

1957年6月8日 毛沢東が中共中央党内指示「組織力量反撃右派分子的猖狂進攻」〔力をあわせて右派分子のすさまじい進攻に反撃しよう〕を起草する。『人民日報』が毛沢東の書いた社説「這是為什麼？」〔これはなぜか〕を掲載、反右派闘争がはじまる。

韋君宜は、『文芸学習』廃刊の理由について、「憶『文芸学習』」で次のように述べている<sup>(28)</sup>——今、見てみてもその考えは素朴なものであり、異なった主張を平等に並べて討論したにすぎず、人を驚かせるような議論はまったく無かった。ところが、雑誌は思いもかけず、このために上は毛主席の注意を引き、「北京で世界大戦が起きた」と言われた。「組織部」の討論をしたからである。われわれ編集部は当時、それを聞いて驚き喜んだ。どうしてわれわれがこんなにも重要なのだろう！もちろん大変興奮した。しかし、思いもよらないことに、その後雑誌は実際にはこのために廃刊となった。正式にこの理由は公表されず、この雑誌が誤りを犯したために廃刊となったとも言われなかったが、誰もがみな知っていた。

この「組織部」の討論とは、『文芸学習』1956年第12期から1957年第3期まで4期にわたって、「関于『組織部新来的青年人』的討論」の特別欄を設けて連載したことである。1956年第12期で初回の討論を掲載する際には、「編者按」として、次のように記している——今年の『人民文学』9月号に王蒙の小説「組織部新来的青年人」が發表された。この作品は大きな反響を呼び、いくつかの機関・学校では、人びとが食卓や寝室でさまざまな異なった意見をさかんに交換している。よい作品だと思う人もいれば、不健康で、現実を歪曲していると考える人もいる。本誌はこの作品について討論をおこなうことを決定し、今月号にまず7編の投書投稿を發表する。この作品を肯定するもの、否定するもの、両方の意見を掲載した。この作品を読んだ読者には、奮って討論に参加していただきたい。

この誌上討論について、『文芸学習』1957年第2期では投稿800余件、第3期ではかなり広範な影響を生み、あわせて1300余件もの投稿を受け取ったという。4期にわたる討論で、全部で25編の文章が誌上に發表された<sup>(29)</sup>。これが、毛沢東の注意を引いたのである。

『文芸学習』1957年第1期「編者的話」では、以下のように記しているが、これも「双百」

の方針に呼応したものである——新しい1年を迎え、本誌の内容も刷新しようと思う。簡単にいえば、読者が「視野を広め、思想を活発化する」のを努めて助けるということである。「視野を広める」ために、われわれが紹介する作品の範囲をできる限り広くする。「思想を活発化する」ために、読者が各種の異なった、さらには完全に相反する意見の前で、自らが独立して思考する能力を発揮し、マルクス・レーニン主義の原則を運用して是非を明らかにする機会を提供する。そのため、われわれは本誌において様々な自由討論を展開する用意をしている。

『文芸学習』1957年第3期「編者的話」では、この討論について、以下のように総括している——編集部は「百家争鳴」の精神にもとづき各種の代表的な意見に可能な限り発表の機会を与えた。芸術的形象によって、わが国の新時代に必然的に生み出される人民内部の矛盾を明らかにし、前進の過程にある、われわれ自身の欠点を批判するというのは、実のところ一種の新たな試みであり、作品もまだ少ない。王蒙同志は厳粛かつ真剣にこのような新たな探索をおこなった。討論中、若干の粗暴で独断的な意見、たとえば中央の所在地には官僚主義などいくらも有るはずがないとか、この作品は老幹部に対する知識分子の勝利である、「批判の範囲をはるかに越えている」などの意見が際立っていたが、これらの誤った論点については、討論に参加した同志がこれまでに批判しているので、いちいち反論しない。この度の討論で、作者とわれわれ全員が生活の複雑性と作品における問題の二面性を認識するのを助け、単純かつ一面的に作品や生活を見てはならないと啓発することができたなら、討論の目的は達成されたことになる。意見はすでに多く発表されたので、討論は本号で終えることにする。

しかし、この総括もまた毛沢東の講話にのっとったものだった。

毛沢東は、1957年1月の省市自治区党委員会書記会議と、同年2月の最高國務會議第11次（拡大）會議、3月の中国共産党全国宣伝工作會議で重要講話を発表したが、そのすべての講話で「双百」の方針と、文芸工作について語っている。

黎之によれば、1月の省市自治区党委員会書記会議では、「双百」方針の意義をもう一度系統的に説き、同年1月7日『人民日報』に掲載された、陳其通らの意見について、「陳其通ら4同志の文芸工作についての意見はよくない、香花だけが開いてよく、毒草は開かせてはならない、というものだ。われわれの意見は反革命の花だけは開かせてはならない、もし革命的な顔かたちで開くなら、開かせなければならない、というものだ」「この4人の同志は善意で、党のため国のため、忠誠心に燃えているのかも知れない、だが意見は間違っている」と言った。しかしこの講話が、1977年版『毛沢東選集』第5巻に収録される際、『人民日報』1月7日に掲載された4人の文章について述べた箇所は削除されている<sup>(30)</sup>。

また、毛沢東は省市委員会書記会議の期間中に、『文芸学習』第2期の「關於『組織部新来的青年人』的討論」欄に掲載された、馬寒氷のこの小説に対する批判<sup>(31)</sup>を読んだ。馬寒氷とは、上の4人のうちの1人である。そして会議が終わると、周揚、林黙涵ら作家協会の責任者を呼んで、この小説に対する見方について語った。黎之によれば、毛沢東は、「百花齊放・百家争鳴の方針を堅持しなければならない」「『組織部』は良く書けている、作品がわれわれの工作中的の欠点について批判するのは良いことだ」「われわれは批判を歓迎すべきだ。馬寒氷らの文章では、北京の中央所在地に官僚主義は存在しないと言うが、これは間違っている。この小説にも欠点はある。肯定的人物はうまく書けていない。林震は無力で、さらに小資産階級の情緒がある」と語った。黎之は、「これは私の知っている毛沢東の唯一の当代短編小説についての分析」だと言う<sup>(32)</sup>。

このとき、郭小川（1919-1976）、当時、中国作家協会党組副書記・中国作家協会書記処書記兼秘書長も呼ばれて、毛沢東の話を聞いたことを日記に書いている。2月16日のことで、毛沢東は、主に「組織部」と、李希凡と馬寒氷のこの小説に対する批判について話した、毛沢東はこの2編の批判に特に不満だった<sup>(33)</sup>と記している。郭小川の日記によれば、このときの毛沢東の談話を、2月19日邵荃麟が作家等に伝達した。邵荃麟は「途中で気力が続かなくなり、伝達もあまり力強くなって、はっきりせず、反官僚主義の部分については、あまりにも遠慮しすぎだった」と記している。邵荃麟（1906-1971）は、当時、中国作家協会党組書記。

2月19日におこなわれたこの伝達は、『文芸学習』編集部員の周尊攘も聞いていて、次のように記している<sup>(34)</sup>——毛沢東の談話の中で『文芸学習』編集部を最も喜ばせたのは、本誌で「組織部」の討論を展開していることについての部分だった。現実をひどく歪曲した小説だと考える人もいたので、『文芸学習』では圧力に対抗して討論を組織し、討論によって小説に公平な扱いを取り戻したいと願っていた。毛沢東は談話の中で、王蒙の小説には二面性がある、反官僚主義の面は良い、しかし欠点もある、小資産階級の情緒があり、否定的人物は良く書けているが、掘り下げ方が足りない、肯定的人物は生彩に欠けている、と述べた。これは『文芸学習』の討論に対する肯定であり、結論でもあり、編集部の同志は大いに鼓舞された。

毛沢東はさらに1957年2月27日の最高国務会議第11次（拡大）会議と同年3月12日の中国共産党全国宣伝工作会議における講話の両方で、王蒙の小説の反官僚主義問題について述べている。黎之によれば、2月の最高国務会議第11次（拡大）会議の講話で、毛沢東は「組織部」について語った後、いま王蒙を包囲討伐している人がいる、「私は王蒙のために包囲を解いてやろう」と述べた。この講話は当時かなり広範囲で録音が放送されて、

座談会や討論会が組織され、強烈な反響を呼んだ。知識界に「大鳴大放」のラッパを鳴り響かせたといえる。2月末におこなわれたこの講話は加筆修正のうえ、「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」と題して6月19日の『人民日報』に掲載されたが、それは中共の方針が「反右派闘争」へ転換した後のことだった。講話記録稿から最後の発表稿まで、中間の修正稿を加えて全部で15稿あった。しかも15回の修正を経て、6月19日正式に発表された時、この「鳴放」を奨励する講演は「右派に反撃する思想武器」となっていた。修正箇所があまりに多く、大量の講話が削除され、話されなかった重要な内容が大量に加えられたのである。たとえば、「双百」方針の妨げとなる誤った思想とやり方に対する批判と、その典型的な事例が大量に削除された。王蒙と「組織部」について言及している部分もすべて削除された<sup>(35)</sup>。しかし、そのことがわかるのは、6月19日『人民日報』に掲載されてからのことであった。

『文芸学習』で4期にわたって連載された「組織部」の討論が、毛沢東の注意を引き、毛沢東が最高國務会議や中央宣伝工作会議などで何度もこの小説について述べたことから、当時は『文芸学習』がひととき目立った雑誌であったことが知られる。発行部数も『文芸報』や『人民文学』よりも多かった。毛沢東の「組織部」についての発言が、『文芸学習』の討論に対する肯定であり、結論でもある、と周尊攘も書いていたように、毛沢東の「介入」によって「組織部」論争は一段落し、1957年上半年期は、この小説についての意見はおのずと毛沢東の観点からなる基点に統一された<sup>(36)</sup>。王蒙は、毛沢東の発言について、「当然すべては最高のレベルから、1人の政治家として述べたものであり、そのことによって、できる限り空気を活発にして自由な環境を創造し、真に百花斉放・百家争鳴を貫徹させようとしたのだ、と私は考えた。これらの講話は私にとって大きな助けとなり、少なくとも私を保護してくれた」と述べている<sup>(37)</sup>。

1957年4月10日には、『人民日報』が社説「引き続き大胆に『百花斉放・百家争鳴』の方針を貫徹しよう」を発表し、ようやく1月7日掲載の陳其通ら4人の文章を批判したが、この年の初めから、毛沢東はたえず『人民日報』を批判してきた。4月10日、社説を読んだ毛沢東は、周揚、鄧拓、『人民日報』編集委員会のメンバーと王若水を引見する。このとき毛沢東はおおいに腹を立て、「党中央が百花斉放・百家争鳴を提唱しても、君らは宣伝をせず、態度表明もせず、中央に連絡もとってこない」、「以前、書生が新聞をやっていると君〔鄧拓〕を批判したが、間違いだった。死人が新聞をやっているのだ」と言ったという<sup>(38)</sup>。鄧拓（1912-1966）は、当時『人民日報』社社長兼総編集。

また1月7日『人民日報』に陳其通ら4人が連名で文章を発表した後、同じ4人がさらに連名で「組織部」は毒草であるとする文章「是香花還是毒草」を書いて、『人民日報』に

発表する準備をしていた。その清刷を毛沢東に届けたところ、毛沢東は非常に不満で、毛沢東に止められて、文章は発表されなかった<sup>(39)</sup>。彼ら4人は、1月7日に文章を発表して以来、繰り返し毛沢東に批判され、「左」の教条主義の代表とみなされ、大きな政治的圧力を受けていた。

#### IV 反右派闘争と『文芸学習』

---

##### 1 「双百」から反右派闘争への転換

1956年5月の最高国務会議での毛沢東の「双百」の提起と、それに依拠した陸定一の演説後も、こうした情勢について、懐疑、憂慮、さらには反感をいだく者が少なくなかった<sup>(40)</sup>。1957年1月7日の『人民日報』では、陳其通ら4人が異議を唱え、それに対して『人民日報』は掲載するだけで、何の態度表明もおこなわない。そこで毛沢東は1月、2月、3月にあわせて3度の重要講話をおこない、知識界に「大鳴大放」のラッパを鳴り響かせたのである。

当時、文学雑誌は、作家にいち早く新作を発表する場を提供するのみならず、「全国の文学創作と文学批評を集中して秩序立てて管理し、それによって統一された路線を持つ文学構造を打ち立てるのに必要」<sup>(41)</sup>なものであった。文連〔中国文学芸術界連合会〕と中国作家協会は雑誌の編集出版仕事を重視し、1949年には『人民文学』と『文芸報』を創刊、1956年までに『新観察』『文芸学習』『訳文』を創刊し、直接主管していた。1956年「双百」の方針が打ち出されると、中国作家協会はそれから1年余の間、文学雑誌についての会議を何度も開催した<sup>(42)</sup>。重要なものは次の2回である。

1956年11月21日-12月1日、北京で文学期刊編集工作会議を開催し、文学雑誌はいかに「双百」方針の執行を貫徹し、文学事業の発展と繁栄を推進させるかについて討論した。会議には全国64の文学期刊の主要な編集者90余人が参加、「大胆にこの方針を実行し、異なった意見・観点の文章と、異なった風格・題材・形式の作品を、勇気を持って発表する。特に生活の中の欠点を鋭く批判した文章と作品は、悪意ある誹謗でさえなければ、発表すべきである」というのが、会議における普遍的な見解であった。

もうひとつの会議は、1957年4月下旬毛沢東の講話に呼応して、指導下にある雑誌（『人民文学』『文芸報』『文芸学習』『詩刊』『訳文』『新観察』『中国文学』）の編集座談会をおこなった。会議では、教条主義反対と修正主義反対の「ふたつの戦線はどちらも重要」だと明言されたが、依然として「大放」と「大開門」の強調に重点が置かれた。

この時期のすべての情勢とこれらの会議によって、文学雑誌に大きな変化が起きた。『人

民文学』の発行部数は2倍に増加し、『人民文学』には、後に「百花文学」あるいは「創作の逆流」といわれる一連の代表的な作品が発表された。これらの作品は、現実生活の矛盾を鋭く暴露することを主題としていた。本稿で取り上げた「組織部」もそのひとつである。

「双百」方針のもと、こうした盛り上がりを見せるなか、突然、反右派闘争への転換がなされた。毛沢東が「双百」から反右派闘争への転換の準備を最初に指示したのは1957年5月15日であり、それを邵荃麟が知ったのは、黄秋耘によれば、5月18日夜のことである<sup>(43)</sup>。

黄秋耘はこう記している——その夜、黄秋耘は邵荃麟の家で雑談をしていた。邵荃麟は上機嫌で、いかにも楽しそうに浙江視察の話をした。彼は浙江文芸界の作家らと座談会をおこない、中央の精神を伝達し、「鳴放」を奨励<sup>(44)</sup>。『文芸学習』の編集方針については、「放」であれ、大いに「放」であるべきだと強調した。話がもりあがっているところに、電話が鳴り、邵荃麟がすぐに電話をとった。2、3分もしないうちに、たちまち顔色が変わり、手はふるえ、慌てた暗い表情になった。時計を見ると9時20分だった。予期せぬ重大事件が発生して、緊急会議が開かれるのだと黄秋耘は思った。彼は電話をおくと、「周揚からだ、うん、変わった」とだけ言った。いったいどう変わったのか、彼は言わなかったし、黄秋耘ももちろん聞かなかった。しばらく沈黙してから、彼は「今夜の話は帰ってから絶対の人に言うな、しばらくは動くな、どれか原稿を抜いたりすれば、それだけで疑われる」と念を押した。彼がすぐ出かけることがわかったので、急いで辞去した。

黄秋耘は、周揚もこの転換を知って1日とはおらずに邵荃麟に知らせたのだろうと書いている。当時、周揚（1908–1989）は中共中央委員候補で中央宣伝部の文芸担当副部長、邵荃麟は中国作家協会党組書記。黄秋耘の記述から、周揚、邵荃麟のような文芸界の指導者でも、この政治情勢の急転は、突然の予期せぬ事態だったことが知られる。そして黄秋耘にとっては、たまたまそこにおいて、偶然知っただけのことなのだった。

その翌日の朝、黄秋耘が編集部に戻ってたずねると、『文芸学習』はもう印刷にまわされ製本の最中で挽回のしようがなかった。もう2、3日早くこの情報を知っていたら「刺在哪里？」〔刺はどこにあるか〕のような文章を発表することは絶対にありえなかった。しかし『大公報』と『光明日報』から措辞の尖鋭な雑文を何編か抜き取るのには間に合い、「罪」をほんの少し軽減することができたという。

『文芸学習』副主編の黄秋耘が1957年5月18日の夜、「双百」から反右派闘争への転換を知ったとはいえ、次号の『文芸学習』の編集には間に合わず、新たに「矛盾在哪里」〔矛盾はどこにあるか〕欄まで開設し、黄秋耘の「刺在哪里？」も掲載したまま、同誌1957

年第6期は、6月8日に出版された。同じ日に、『人民日報』は社説「これはなぜか」を掲載し、反右派闘争がはじまったのである。

『文芸学習』1957年第6期「編者的話」では、次のようにさらに高い調子で「双百」方針の貫徹を呼びかけていた——読者が本誌を開くと、まず真っ先に「矛盾在哪里」の欄の文章が目に入るだろう。〔略〕いま党の整風運動は熱烈に展開されている。全国の文芸界も党の呼びかけに呼応し、われわれの文学事業における各方面の矛盾を次々と明らかにしなければならない。矛盾を広い範囲で明らかにし、实事求是のやり方で掘り下げて研究討論をおこなうのでなければ、前進中の人民文学事業における障害を克服し、われわれの文学創作と文学理論批評に繁栄をもたらすことはできない。したがって、この「矛盾在哪里」の欄を開設するのは必要なことであり、作家と読者にはこの討論に奮って参加されることを希望する。

『文芸学習』1957年第7期から編集方針は180度転換されるが、この政治情勢の急転に対応できなかったのであろう、第7期に「編者的話」は無い。

## 2 黄秋耘の雑文

黄秋耘は、「刺在哪里？」の中で、次のように記している。

教条主義、セクト主義の「寒流」は極めて恐ろしい雰囲気を生み出している。生活の中の暗い面、不健康なもの、いびつですらあるものを批判した文章、人民大衆の困難と苦しみを描いた作品は、ほとんどすべてその動機と効果のいかんにかかわらず、「現実を歪曲し、生活を貶め、社会主義制度を誹謗する」と非難される。時には、作者にでっち上げの罪名を着せ、意識的に「反党反人民」行為をおこなったと頑なに言い張ることさえある。〔略〕こうした恐ろしい雰囲気の下で、多くの作家は精神的に極度の不安を感じている。彼らは良心に背いて現実を粉飾することを望まないが、生活の真実を描くこともできない。彼らは人民の困難と苦しみの前で目を閉じることに耐えられないが、しかしまた、自らの良心を揺るがす事柄に対して沈黙せざるを得ない。いささかの疑問もなく革命作家は誰でもみなわれわれの社会主義制度を心から擁護するものであり、われわれの光り輝く将来について十分に自信をもっている。だからこそわれわれの革命事業の妨げとなる障害物と、われわれの麗しい生活を汚す灰塵を容認することができない。焦って生活に関与し、生活の中の暗い面を暴こうとするのは、まさに治療の必要性を喚起して、欠点と誤りに対して正しく闘争をおこなうことを人民大衆に教え、われわれの工作を改善進歩させるためなのである。

黄秋耘にとって「刺在哪里？」は、もう2、3日早く政治情勢の急転を知っていたなら発表することは絶対にありえないという文章であった。ということは、すなわち「双百」の最高潮のときに書かれたものといえる。上述の中国作家協会が開催した文学期刊編集工作会議と編集座談会で出された見解や、5月18日夜上機嫌だった邵荃麟のことからも、黄秋耘が「刺在哪里？」を書いたとき、「生活に関与せよ」は、まだ嫌悪すべきスローガンでも、疑いを持たれるようなスローガンでもなかった。作家らは、作家協会の指導者を含めて、生活の中の矛盾と衝突を暴露することについて熱く語っていた。洪子誠は、当時「人びとは『無衝突論』や『生活を粉飾する』ことに対して、嫌悪感を抱き、不満を持っていた」と述べている<sup>(45)</sup>。

洪子誠は、「生活に関与」することを提唱する創作思想方面で、黄秋耘は当時突出していた、黄秋耘は当時の文学状況と作家の精神状態について分析を加え、秋耘・杜方明のペンネームで鋭く直言してはばからない批判を発表した、と述べ、主要なものとして次の5編を挙げている<sup>(46)</sup>。ペンネーム、タイトルの後は掲載誌である。

秋耘「鏽損了靈魂的悲劇」、『文芸報』1956年第13号（7月15日出版）

秋耘「不要在人民的疾苦面前閉上眼睛」、『人民文学』1956年9月号（9月8日出版）

秋耘「一部用生命写出来的書」、『文芸学習』1957年第2期（2月8日出版）

杜方明「犬儒的刺」、『文芸学習』1957年第5期（5月8日出版）

秋耘「刺在哪里？」、『文芸学習』1957年第6期（6月8日出版）

1956年5月「双百」の方針が提起されてからも盛り上がり欠けるなか、黄秋耘は「双百」に呼応していち早くかなりの文章を発表し<sup>(47)</sup>、それが突出していたために反右派闘争で批判されることになった。たとえば『文芸報』1957年第36号（12月15日出版）には、笑雨の「生活陰暗？ 還是眼睛陰暗？——略評黄秋雲同志的幾篇雜文」と康濯の「黄秋雲的修正主義」の2編の黄秋耘批判が掲載されている。なお、黄秋雲は黄秋耘のことであり、当時「秋耘」はペンネームで、『文芸学習』の編集委員の名前も黄秋雲と記されている。

笑雨は「生活陰暗？ 還是眼睛陰暗？——略評黄秋雲同志的幾篇雜文」の中で、最近、黄秋雲同志の文章数編を読んだと述べ、洪子誠が挙げた5編のうち「一部用生命写出来的書」を除く4編と、「啓示」「從『分子和分母』説起」の6編のタイトル<sup>(48)</sup>を挙げて、「実を言えば、秋雲同志の言う暗い面とは、必ずしも暗い面とは限らない、暗い目で物事を見れば、何もかもすべてが暗くなるようなものだ」と批判を加えている。

黄秋耘によれば、反右派闘争の初期、中央宣伝部は黄秋耘を含む文芸界の10人の言論集を印刷配布した。批判するために用いるのである。この10人は馮雪峰、丁玲、陳企霞、艾青、秦兆陽、劉賓雁、蕭乾、徐懋庸、劉紹棠と黄秋耘で、人びとは、中央はこの10人

を右派と内定したと考えた。ところが主として邵荃麟の尽力で、10人のうち黄秋耘のみ「網の目から漏れ」た。そこで反右派闘争が一段落したとき、多くの人が、黄秋耘が右派分子と認定されなかったことを訝しく思った、という<sup>(49)</sup>。

### 3 韋君宜批判

黄秋耘が右派とされなかったのは、邵荃麟の尽力が大きかったとはいえ、最初に力の限り黄秋耘を弁護したのは韋君宜だった。「郭小川日記」1957年7月2日に、8時半から作家協会党組会議が開かれ、「韋君宜は『文芸報』社説の問題をすどく持ち出し、黄秋耘と劉紹棠に対する批判は行き過ぎだと考える、張光年と陳笑雨反撃をおこなう。会議は終わらず、明日引きつづき開催」、7月3日には、会議で郭小川も発言し、黄秋耘の文章を批判する、「韋君宜も、私〔郭小川〕があの日、黄秋耘の文章に大した問題は見られないと考えていた、と発言」と記されている。

韋君宜は会議の席で発言しただけではなく、それより前の6月29日に郭小川をたずねている。「郭小川日記」のこの日には、「午前中、韋君宜が来て泣く、『文芸報』が黄秋耘を批判したためと、黎辛がこの文章を例に出したため。この人の右の情緒は本当に濃厚で激しく、だから左を非常に恐れるのだ」と書かれている。

ここで言われている『文芸報』社説の問題とは、『文芸報』1957年第13号（6月30日出版）掲載の「反対文芸隊伍中的右傾思想」を指している。日記6月29日の『文芸報』も、30日より若干早く出版された同じ号を指しているのもであろう<sup>(50)</sup>。この社説「反対文芸隊伍中的右傾思想」では、文中に名前は出てこないが、『文芸学習』に発表された黄秋耘の「刺在哪里？」と劉紹棠の「我对当前文芸問題的一些浅見」〔1957年第5期〕中の言葉を使って、黄秋耘と劉紹棠を批判している。

たとえば黄秋耘は「刺在哪里？」の最後の段落で、「人生にとって何の価値もないすべての苦しみを終わらせる時である、この『苦しみを生みだし鑑賞する混迷と強暴』をすべて取り除く時である」と書いているが、社説ではこの「混迷と強暴」を使って次のように書いている——一部のマルクス主義者を自称する作家らは、修正主義の調べを唱えている。彼らは根本から党の指導を否定するために、党の指導工作を真っ暗闇に描写する。このような現象に対して、われわれは黙っていることはできない。ある人は、なんとわれわれのためにこんな絵を描いてくれた。それによれば、党の文芸事業に対する指導は、官僚主義・セクト主義・教条主義的統治に他ならないという。われわれはいま「強暴で混迷の時代」にいるのだそうだ。指導者は「強暴」で、指導される文芸隊伍は「混迷」している。

7月2日と3日の作家協会党組会議で、韋君宜はこの社説を取り上げて、反論したので

ある。6月29日に郭小川をたずねたとき、韋君宜は、激しく泣いて涙を流しながら「黄秋耘を右派にするのは不公平だ。『文芸学習』での多くの決定は彼と一緒に下したものだ。いくつかの大きな問題について、私と黄秋耘の見方はすべて同じ」、「組織部」の誌上討論も、ショーロホフの「一個人的遭遇」の転載も、私と黄秋耘が共同でしたこと、「『文芸学習』の主要な事柄は、人事も、何を発表するかも、私と黄秋耘の2人で相談して決定したこと」と言ったという<sup>(51)</sup>。

上司である作家協会党組書記の邵荃麟には、韋君宜は大声で「黄秋耘を右派にするなら、私も右派にするように、私は『文芸学習』の主要な責任者で、誤りというなら彼よりも少なくはない」とも言った<sup>(52)</sup>。黄秋耘によれば、『文芸学習』の部下では科長クラスの幹部2人、李興華と楊覚が右派となったが、この件についても韋君宜は作家協会の実権派と激しく闘争した。作家協会の反右派闘争は、主として党組副書記の劉白羽が指導した。韋君宜は李興華が右派にされないように、全力を尽くし、劉白羽と何度も口論したという<sup>(53)</sup>。

こうして運動の矛先は瞬く間に韋君宜にも向けられ、韋君宜は本来の「〔党の後に〕ぴったりと従う派」からつまづいて「右派の辺縁」に落ちた<sup>(54)</sup>。韋君宜は「憶『文芸学習』」で、当時について「一方で、一日中作家協会が招集した会議で吊るし上げられ、また一方では編集部に戻って会議を招集し他の人を吊るし上げなければならなかった。このような『ひとりで二つの任務に就く』のは本当にあまりにも苦しく、もう発言権がないだけでなく、持ちこたえてゆく気力もなかった」と述べている<sup>(55)</sup>。

韋君宜が「吊るし上げられた会議」については、1957年11月12日『人民日報』に、「これまでに中共作家協会党組はすでに拡大会議を5回開催して、『文芸学習』主編韋君宜と編集委員黄秋雲の2人の同志の文芸問題における修正主義思想について系統的な批判をおこなった。韋君宜と黄秋雲は初歩的な自己批判をおこなった」という記事<sup>(56)</sup>が掲載されている。この他に、「郭小川日記」にも記述がある。8月17日に『文芸学習』で「韋君宜の会議が開かれ、韋君宜はいささか自己批判をしたが、掘り下げ方がまるで足りない。私は約1時間発言した」、と郭小川は書いている。その次は、10月の17日と24日に「韋君宜の思想批判の会議」が、10月26日は「韋君宜の会議」が開かれ、17日の会議で韋君宜は自己批判をしたことが記されている。さらに「郭小川日記」によれば、10月29日に「黄秋耘の思想批判の会議」が開かれた後、11月の1日、16日、23日に「韋君宜と黄秋耘を批判する会議」が開催されている。韋君宜もこのように何度も批判闘争会にかけられ、右派にされる可能性は大いにあったが、かつての上司、胡喬木のおかげで何とか難を逃れることができた<sup>(57)</sup>。

#### 4 『文芸学習』編集部の自己批判

韋君宜は、『文芸学習』で「反右派闘争に呼応して多くの批判と自己批判の文章を発表した」と述べていた。これはつまり、会議で一方では批判されながら、もう一方では会議を召集して他の人を批判しなければならないと同時に、さらに『文芸学習』主編として、自己批判だけではなく他の人を批判する文章も編集して『文芸学習』に発表したということである。

『文芸学習』は、1957年第12期で廃刊となった。韋君宜は、「廃刊の理由を述べることもなく、廃刊の辞もなく。——もともと何の理由も無かったからである」と述べていたが、いったい何が批判の対象となったのか。ここで『文芸学習』に掲載された編集部による批判と自己批判の文章を見ておく。編集部による批判と自己批判の文章には、以下のものがある。〔 〕内は、掲載された号数である。「読者对本刊的批評」、本刊評論員「対青年作者和読者們説幾句話」、黄秋耘「批判我自己」〔以上、1957年第9期、9月8日出版〕、朱慕光「駁所謂『写真实』和『写陰暗面』」〔同第10期、10月8日出版〕、本刊編集部「徹底糾正我們的右傾思想」〔同第11期、11月8日出版〕。

「読者对本刊的批評」は、反右派闘争が全面展開して以来、編集部が受け取った多くの読者からの手紙の摘要である。本誌の先の一時期に現れた資産階級傾向と、反右派闘争参加に消極的であることに対する批判の手紙で、『文芸学習』の工作の点検に役立てると書いている。

「対青年作者和読者們説幾句話」は、『文芸学習』の「資産階級傾向問題については、さらに詳細な点検が必要である」として、急遽おこなわれた『文芸学習』批判である。本文では、まず反右派闘争とは「政治上思想上の社会主義革命であり、政治上思想上、無産階級と資産階級の勝敗を決する闘争である」と定義を述べたうえで、「知識青年、文芸青年、若い文学創作者はこの機会を逃さず、闘争の中で教育を受けなければならない」と記している。それから『文芸学習』はこれまで文章を発表して誤った意見を提起したと言い、韋君宜が7月2日の作家協会党組会議で庇った劉紹棠についても、「党の文芸綱領を否定し、普及を主とする原則を否定した」、鄧友梅の「在懸崖上」についても、極めて不健康な思想感情に対して、厳しく対処し、寛容であってはならない、と批判する。さらに上の世代の知識分子については、「業務上の成果や、文学事業上の名声だけを見て、彼らを盲目的に崇拜してはならない。たとえば丁玲は、すでに明らかにされた資料によれば、極めて深い反党感情を抱き、人には言えないことをどれほどしてきたことか。その他にたとえば呉祖光など、最近新聞紙上で暴かれた有名人はすべて暗い情緒をもち、墮落した生活を送り、多くの反党反社会主義活動をおこなった」という記述までである。

「組織部」の討論において、「粗暴で独断的」と批判していた主張である。この文章が掲載された第9期は、巻頭に「粉碎丁陳反党集団」の特別欄が設けられ、草明らの5編の文章が収録され、丁陳反党集団とその他の右派分子に反対する文章に特に多くの紙幅を割いて発表している。「編者的話」によれば、1957年第8期編集集中に高潮期を迎えようとしていた反右派闘争は、第9期編集集中にはさらに深められた。第9期「編者的話」には、「丁陳反党集団の摘発は、文学界の反右派闘争の重大な収穫である」と記されている。

いかにも明確で、わかりやすい文章である。韋君宜は『中国青年』総編集のときの執筆姿勢について、青年読者がはっきり分らないのでは困ると思い、いつも「できる限りわかりやすく述べ、含蓄のある表現はまったく使わなかった。文章に凝ることはまったくしなかった」と述べている<sup>(58)</sup>が、『文芸学習』もまた青年向けの普及を目的とした雑誌であるため、同じ執筆姿勢がとられた。「対青年作者和読者們説幾句話」を書いた本刊評論員は誰なのか、第8、9期「編者的話」を書いたのは韋君宜なのかどうかかわからないが、韋君宜は主編として、このような文章を雑誌に掲載して出版したのである。明確に、わかりやすく書くから、いっそうごまかしようもなく反右派闘争が始まるまで進めてきた方針と主張を、それまで「粗暴で独断的」としてきた手法で、すべて覆さざるを得なかったのは何とも無残である。

ここで「対青年作者和読者們説幾句話」の、先の引用部分以降の要旨を整理してあげておく。

われわれは常に健康的な情緒をいっばいに保持し、無産階級の立場にしっかりと立ち、断固として党に従い、党の文学事業に努めなければならない。党のことを聞かなければならない。党のことを聞き、党の指導に服従することは、高い美德であり、革命性のあらわれである。こうしてはじめて、新たな光明に充ち溢れた、人を向上させる、しかも豊富で多彩な文学を創造することができる。

『文芸学習』はこの重要な時期に青年を指導する責任を果たさず、反対に資産階級の思想傾向をあらわし、大きな誤りを犯した。そのうち、誤りの最も重大な文章は劉紹棠の「我对当前文芸問題的一些浅見」と黄秋耘の「刺在哪里？」である。これらの文章は討論のための文章であるにもかかわらず、発表時、ただちに明確で強力な批判をおこなわなかったのは編集思想の誤りである。雑誌の誤りはこれだけにはとどまらず、いかに青年を指導するか、その方向の問題において誤りを犯した。誌上に資産階級傾向に反対する文章も発表はしてきたが、2つの戦線の闘争の問題の上で、たえず動揺し、5、6月号では明らかに右に偏った。文芸青年の若干の右傾情緒に批判を加えなかったばかりでなく、助長までした。青年の思想発展についての見方に誤りがあったため、大いに開放し、独立して思考し、様

様な作品を読んで視野を広めよ……としか主張せず、共産主義的教育を強調しなかった。

黄秋耘は『文芸学習』編集委員であるにもかかわらず、青年の正しくない傾向を是正する手助けをせず、反対に自分が誤った文章を書いた。これは非常に重大な誤りである。韋君宜は主編であり、雑誌の傾向に誤りが生じ、青年を誤った方向に指導したという問題において、当然主要な責任がある。

以上が、「対青年作者和読者們説幾句話」の要旨であるが、『文芸学習』批判も編集部による自己批判も基本的にはみな同じことを批判していて、第11期に掲載された「徹底糾正我們的右傾思想」は、これをより徹底させただけのものである。

「徹底糾正我們的右傾思想」では、本誌編集部が重大な誤りを犯したのは1956年7月号からで、資産階級思想傾向が突出、この時期、反党反社会主義の文章まで発表、編集思想における右傾の誤りは、今年5、6月号が最も突出して、深刻なものという。劉紹棠の思想は、もはや「反党反社会主義の誤った思想」とされ、より重大な誤りは、黄秋雲の「刺在哪里」を発表したことで、この文章は劉紹棠及びその他の右派分子と同じ立場に立つものであり、一連の重大な誤りは、編集思想において修正主義の誤りを犯した具体的な表われである、という。「党が双百の正しい方針を実行したのは、自由な議論と自由な競争の方法によってマルクス主義思想を発展させ、資産階級思想に打ち勝ち、社会主義文芸と科学を発展させるためである」にもかかわらず、「資産階級の自由主義の立場に立って党の政策を曲解した」、「五四以来の作品と中外の古典を紹介する面でも偏向があった」、去年8月〔第9期〕から評論内容の範囲を拡大するために「文芸学習談座」を「無所不談」に改めたが、「この1年来話題の範囲は縮小し」、「多くの文章が青年読者大衆の需要と興味からかけ離れ、文芸工作の欠点についてしか語っていないものもある」、「文学において工作と生活中の欠点を暴露するのはまったく構わない。必要なことは労働者階級の立場に立って、これらの欠点を克服することを目的とするべきということ」、「以上のさまざまな誤りが生じたのは、主に編集部の指導思想上の重大な右傾によるものであり、階級の立場を喪失し、認識に誤りがあり、党の指導を正しく受けなかったからである」と、「双百」方針に呼応して進めてきた1956年7月号からの編集方針をすべて否定して、自己批判をし、「本誌を、社会主義事業を守り、建設するために、共産主義の次の世代の青年を教育するのに有効な工具としなければならない」と言う文章で、本文を締め括っている。だが、『文芸学習』は次号で廃刊となった。

朱慕光の「駁所謂『写真实』和『写陰暗面』」が掲載された第10期「編者的話」には、「丁陳反党集団と文芸界のその他の右派集団に反対する闘争は、すでに大きな勝利を得た」と記されている。本文については「本誌編集委員の黄秋耘が提出した『写陰暗面』〔暗い

面を書こう] のでたためな議論に対して、朱慕光の批判文を公表した」としか書かれていない。しかし朱慕光は韋君宜だったのである。韋君宜は、『思痛録』の中で次のように記している<sup>(59)</sup>——黄秋耘同志の「不要在人民的疾苦面前閉上眼睛」〔人民の苦しみを前に目を閉じてはならない〕と「鏽損了靈魂的悲劇」は、どちらも中央宣伝部から名指しで批判された〔中央宣伝部が印刷配布した言論集に収録されたことを指すのであろう〕。彼は『文芸学習』の人であったため、『文芸学習』は態度を表明しなげなかつた。そこで私は、なんと彼を批判する文章を書いたのだった！このとき、私は彼と艱難を共にしていた。2人はいっしょに批判され、毎日人には言えない苦しみと憤りをひそかに語り合ってもいた。その彼を批判するような文章を、どうして私に書くことができるだろう！しかしそれでも私は書いた。私はでたためを書いて、「朱慕光」と署名し、書き終えるとすぐ黄秋耘に見せた。彼はそれを読むと、ほんの少し笑って、「余向光という名前の方がもっとよい、君は光明に向かい、人民の苦しみなど見たこともないのだから」と言った。

韋君宜は『思痛録』の中で、「私は反右派闘争においても良心に悖る事、すなわち中共黨員としてやってはならないことをしてしまった。心にもないことを文章に書くことすらした」と述べ、その具体例としてこの「駁所謂『写真実』和『写陰暗面』」を書いたときのことを記している。このことを、約20年後に書き、反右派闘争から40余年後によく出版された著書の中で、この文章に書かれているのは「でたため」だったと言っているのである。

## 5 黄秋耘の自己批判

『文芸学習』1957年第9期に掲載された「批判我自己」〔3千字〕を書いた経緯について、黄秋耘は次のように語っている<sup>(60)</sup>。

邵荃麟が彼を家に呼んで妻の葛琴〔作家〕と話をさせた。葛琴は黄秋耘のことは変えられる〔右派にならないようにできる〕と言い、黄秋耘が書いた文章の顛末をひとつひとつ、古典からの引用文や書いた時どう考えていたかについてまで、自己批判ではなく、書いた時のままに話させた。そして帰ってから自己批判の文章を書くように、書いたら、自分で持って来ず、韋君宜に渡すこと、韋君宜は主編だから、韋君宜が党組に指示を仰げばよい、と言った。以上のことは、絶対の秘密で、邵荃麟は何も知らないことになっていた。

帰ってから韋君宜に話すと、邵荃麟が書けというのなら当然書かなければならない、と言われた。そこで「批判我自己」を書いて、韋君宜に見せると、これではだめだと考え、彼女の夫の楊述に渡して修正してもらった。楊述は当時、中共北京市委員会宣伝部部长で、こういう文章を直すのに熟練しており〔韋君宜も、黄秋耘より上手いということはない

た]、最初から最後まで全部修正してくれた。それを黄秋耘が清書すると、韋君宜はすぐに持って邵荃麟のところへ指示を仰ぎに行った。邵荃麟は「雑誌に何を発表するかは、主編に決定権があるので、指示を仰ぐ必要はない。上から、黄秋耘の文章を発表してはならないという通達も来ていない。主編が発表してもよいと考え、本人も発表に同意するなら、発表できる」と言ったので、韋君宜は戻ってきて、大急ぎでそれを『文芸学習』に発表した。

黄秋耘は、さらにこう語っている——自己批判の文章が発表されると、自分の問題が緩和されたことがわかった。自己批判の文章を発表することが許されたなら、この人は関門を通りぬけることができ、しかもそれが容易になる。邵荃麟は、これではまだ分量が足りないと心配して、自分でも「修正主義文芸思想一例——論『苔花集』及其作者的思想」を書いて、『文芸報』1958年第1号（1月11日出版）に発表した。『苔花集』の作者とは、黄秋耘のことである。このタイトルも苦心してつけられたもので、「修正主義文芸思想一例」によって批判であることを示しながら、右派批判と区別している。修正主義はマルクス・レーニン主義陣営の中の一部で、もちろん良くはないが、反党反社会主義の右派とは違う。これは思想問題であり、反党行為はないということになる。また、文中で黄秋耘に「同志」が使われているから、右派ではないということである。これはつまり、この人は関門を通過したと宣言したに等しい。この文章が発表されると、この号の『文芸報』は10数日早く出版されたのだったが、北京の文芸界は、突然このような手法を使って批判したことに驚いた。

こうして黄秋耘は庇護されたという。だが、黄秋耘もまた反右派闘争に急転換する直前までの自らの主張を、「批判我自己」によって完全に否定してしまわなければならなかったのである。洪子誠は、

「良心」「同情」「憐憫」……の類の資産階級のイデオロギーは容易に人びとの「理性的な目」を欺き、人びとの革命的警戒性と政治的嗅覚を麻痺させ、特に精神領域に耽溺している資産階級と小資産階級の知識分子についていえば、それらは想像もできないほど迷わせる効果をもっている。私はこのような迷夢の中で相当長い時間、昏々と眠っていた……」〔黄秋耘「批判我自己」中の文章〕——これらの文章を書いたとき、黄秋耘は後に、「その年は、私が間もなく40歳になろうというときで、これは心も理知の面でもすでに成熟している年齢だった」と述べていることから、これらの「贖罪」の文字の中に、どれほどの心の苦闘が含まれていたことであろう。

と記している<sup>(61)</sup>。

## 6 『文芸学習』廃刊の理由

韋君宜は、「われわれが心血を注いでやってきたこの小さな雑誌は、何の理由もなく終結を宣言された」と述べていたが、廃刊の理由は、上記の批判文に見られるように編集部が「重大な誤りを犯した」からである。それでは「終刊の理由を述べることもなく、終刊の辞もなく」幕を閉じたのは、なぜなのか。

「郭小川日記」の中で、『人民文学』と『文芸学習』の合併についての記述が初めて出てくるのは11月29日のことで、「多数が合併に同意せず」と記されている。その次は12月2日で、2時に『文芸学習』に行き、『人民文学』と『文芸学習』の合併問題について話す、郭小川がまず党組の意見を述べ、張天翼、劉白羽、巖文井も発言、みなたいへん興奮し、多くの同志を説得した、という。さらに12月4日3時からの書記処会議で、『人民文学』と『文芸学習』の合併にみなが同意し、12月6日には『人民文学』で、劉白羽が『人民文学』と『文芸学習』の合併を宣言した、という。

「郭小川日記」によれば、『人民文学』と『文芸学習』の合併が承認されたのは12月4日、正式に合併されたのは12月6日のことで、11月29日には、まだ反対意見が多かったため、12月8日に出版される『文芸学習』第12期に、「終刊の辞」を掲載することができなかったのであろう。黄秋耘が反右派闘争への転換を知った5月18日の翌日、6月8日出版の第6期から「刺在哪里？」の原稿を抜き取ろうとしたが、もう製本の最中で間に合わなかったことから知られるように、第12期に「終刊の辞」を掲載するのは無理だったのである。

それでは、なぜ『人民文学』と『文芸学習』が合併したのか。

「郭小川日記」10月28日には、「中央宣伝部の周揚のところへ行って、作家協会の重要工作について話す。雑誌の編集委員を決定するが、『文芸学習』と『新観察』だけが決定できなかった」、11月18日には、会議で「また『文芸学習』と行政室の人員問題について話す」と記されている。これはちょうどこのとき、各誌編集委員会の改組がおこなわれていて、『文芸学習』の編集委員だけ決められなかったということであろう。たとえば『文芸報』の場合、1957年第32号（11月17日出版）から右派分子とされた副総編集の蕭乾、編集委員の鍾惦棐、黄葉眠、陳涌の名前はない。韋君宜と黄秋耘を批判する会議が開かれているさなか、2人を『文芸学習』主編と「副主編」の地位に残すわけにもゆかず、黄秋耘の言うように、あまりに多くの知識分子が右派とされたため人材が不足し、『文芸学習』を廃刊にし、『人民文学』に合併というかたちをとるしかなかったのではないか。10月28日には、まだ『文芸学習』を廃刊にするつもりはなかった、11月18日には、編集委員を決められないので、『人民文学』との合併案が出たかもしれない、そこで11月29日に提案したところ、多数が合併に同意しなかったということであり、『文芸学習』の廃刊は急に

決まったもので、最終号に「終刊の辞」を掲載するのは無理だったのである。

その後、韋君宜も黄秋耘も処分を受け、下放される。「郭小川日記」によれば、『人民文学』『文芸学習』合併後の幹部の配置と幹部の下放問題について討論、決定したのは12月10日のことである。韋君宜は「確かな立場に立たず、かなり重大な右傾の誤りを犯した」ことにより「党内嚴重警告」処分となり、作家協会党組成員の職務を解かれ、中共中央直屬機関の党代表の身分も取り消され、翌1958年1月、『人民文学』副主編に就任、その肩書きのまま、河北省懷来県花園郷西榆林村〔後に、花園公社榆林大隊〕へ下放された<sup>(62)</sup>。黄秋耘は「党に留めて2年間の觀察」処分となっただけで、行政上の降格もされず、1958年、河北省の張家口地区の涿鹿県五堡公社三堡村へ下放された。ここで5カ月過ごし、その後『張家口日報』第1副総編集として4カ月間過ごす。1959年の初めには作家協会に戻り、『文芸報』編集部副主任に就任する。涂光群によれば、これは実質的には降格だという<sup>(63)</sup>。

先に、『文芸学習』廃刊の理由は、編集部が「重大な誤りを犯した」からだと言った。「重大な誤りを犯した」にもかかわらず、それでは韋君宜はなぜ「もともと何の理由も無かった」と述べたのであろうか。

韋君宜の『思痛録』によれば、韋君宜と黄秋耘が批判されていたころ、作家協会のその他の業務はもうすべて停止され、毎日、批判闘争大会が開かれていた。そのなかで最も大規模に行なわれたのが丁玲・陳企霞批判であったが、後には馮雪峰が加えられ、そして最も重点的にやられたのがこの馮雪峰批判だったという。この丁玲、陳企霞、馮雪峰批判がおこなわれたのは、1957年6月6日から9月17日まで合わせて27回開かれた中国作家協会拡大党組会議においてである。韋君宜の同書によれば、そこでは政治問題にもなりえないようなことで、右派であるか否かとは、明らかにまったく無関係なことで、次から次へと「反党」「反社会主義」のレッテルが無理やり天からくだされた。彼ら自身が口をはさむ余地も、他の者が会議においてひと言ふた言異議の申し立てをすることすら、まったく不可能だった。この他にも多くの人の批判大会が開かれ、韋君宜も発言したことはあったが、「自己批判せよ、反論してはならない」と制止され、ここでは、道理があろうとなかろうと、いかなる弁明もまったく許されなかった、という。それならば、丁陳反党集団がまったくの冤罪であることもわかっていたはずである。韋君宜は反右派闘争のときの自分について、「一方で心中不平不満だらけでありながら、もう一方では『おとなしく手なづけられた道具』でありつづけた。そして、情勢がもう少し好転さえすれば、すぐに欣喜雀躍してすべては許されると、必死に自分を説得していた」と書いている<sup>(64)</sup>。

ちょうどそのとき、反右派闘争のさなか『文芸学習』に発表された本刊編集部の「徹底糾正我們的右傾思想」の書き出しは、「全国で反右派闘争が深化し、文芸界の丁陳反党集

団が摘発されることによって、われわれの眼はよく見えるようになった。この厳しい政治戦線と思想戦線における社会主義革命闘争は人びとの階級立場と思想傾向を試した。それによってわれわれは内容が豊富で意義の深いマルクス・レーニン主義の政治思想教育と鍛錬を受けた」である。また黄秋耘の「批判我自己」には、黄秋耘が書いたものか、韋君宜の夫の楊述が書き加えたものかわからないが、「最近摘発された、丁陳反党集団事件と右派分子の反党活動を見れば、文芸界に対する党の指導を強化するのは十分に必要なことである」と記されている。

1950年代から文革前まで、国家の作家に対する管理は主に中国文連と作家協会といった組織を通して実現された。中国作家協会と各地の分会はこの時期、中国作家の唯一の組織であり、文芸運動の展開、文芸政策の実施、文芸決議の公布はすべて中国文連と中国作家協会の名義でおこなわれた。中国作家協会の権力の中核はその「党组」である。中国文連と作家協会は中共中央と毛沢東の指導と直接介入の下で、一連の文学運動と批判闘争を発動し推進するとともに、各時期において作家、批評家に遵守すべき思想芸術路線を提示した。50、60年代において中国文連と作家協会は作家と作品、文学問題について常に「決議」の方式で政治的裁決の性質を持つ結論を出した<sup>(65)</sup>。

「丁陳反党集団」というのも、そのようにして出された結論であり、当時は、「徹底糾正我們的右傾思想」や「批判我自己」の先の引用部分のように書かなければ自己批判として通らなかったのであろう。「丁陳反党集団」はまったくの冤罪であった。その冤罪を根拠に、「丁陳反党集団の摘発は、文学界の反右派闘争の重大な収穫」であり、この社会主義革命闘争によって階級立場と思想傾向が試され、政治思想教育と鍛錬を受けた、彼らの反党活動を見れば、文芸界に対する党の指導を強化するのは十分に必要なことである、というような文章を『文芸学習』に発表したことは、韋君宜にとって「私の編集者としての生涯の中で、足に昔の銃弾が入ったままで、傷口はとうに癒えてはいるものの、ちょっとぶつけるとまだ少し痛むようなもの」なのであろう。反右派闘争に呼応して、多くのこのような批判と自己批判の文章を発表した後、『文芸学習』が廃刊となったことを「思い出すといつも平静ではいられない」のであろう。当時は自己批判しなければならなかったのみならず、他人を批判することも強制された。反右派闘争で右派とされた人びとが名誉を回復するのはそれから20余年後のことで、丁玲の冤罪が完全に晴らされたのは、1984年8月のことだった<sup>(66)</sup>。韋君宜が「憶『文芸学習』」を書いたのは1986年1月のことで、丁玲の完全な名誉回復の後である。『文芸学習』が廃刊となったことについて、「もともと何の理由も無かった」と述べたのは、「正当」な理由は何も無かったという意味ではないだろうか。

韋君宜はまた、本書124頁で引用した部分で、「その後雑誌は実際にはこの〔「組織部」

の討論をした] ために廃刊となった。正式にこの理由は公表されず、この雑誌が誤りを犯したために廃刊となったとも言われなかったが、誰もがみな知っていた」と書いているが、『文芸学習』に掲載された『文芸学習』批判と自己批判で、「組織部」の討論をしたことは直接批判されていない。「徹底糾正我們的右傾思想」では、1956年7月号以降、本誌編集部は重大な誤りを犯し、資産階級思想傾向が突出し、反党反社会主義の文章まで発表したと批判しているのが、「組織部」の討論も含まれることになるが、右傾の誤りが突出していたのは今年5、6月号だとも言っている。「組織部」討論では、後に右派とされた劉紹棠、從維熙、秦兆陽、唐摯〔唐達成〕、劉賓雁らの文章も掲載されているため、反右派闘争中には、発表時、ただちに明確で強力な批判をおこなわなかったとの批判も成立する。先にも述べたように、この小説に対しては「現実を歪曲している」との反発が強かったところ、毛沢東の「介入」によって「組織部」論争は一段落し、1957年上半期は、この小説についての意見は毛沢東の観点からなる基点に統一されただけのことで、反右派闘争が始まってみれば、「毒草」を取り上げて討論したことに対する非難も、この討論が毛沢東の注意を引き、本誌がひととき目立ただけに、激しかったのであろう。王蒙も右派とされたが、この小説が原因とはされなかった。この討論も含めて、「双百」方針下で編集部が心血を注いでやってきた雑誌のすべてが、反右派闘争においては許されなかったのである。

## 7 「香花」と「毒草」の評価基準

洪子誠は、次のように述べている<sup>(67)</sup>——〔当代文学においては〕文学作品の優劣、高低、「香花」か「毒草」の鑑別は、常に「真実」であるかどうか、生活の「本質」を表現しているかどうか、「歴史発展規律」を明らかにしているかどうかの問題を引き起こす。しかし、ある作品が「真実」〔本当に〕生活の「本質」を反映しているかどうかは往々にして確実に証明する術がなく、人によって、時期によって異なる論争が起きる。したがって「真実」と「本質」を描いたか、あるいは歪曲しているかの「結論」は、最後には必然的に、政治的、文学的権力を持つ者が宣言（あるいは覆す）ことになる。

馬寒氷は、心から「革命文芸路線」を「守ろう」とした軍隊作家であり、50年代に流行した歌の作者でもあったが、1957年1月7日陳其通らと連名で文章を発表し、また王蒙の小説を批判したために、何度も毛沢東から厳しい批判を受け、この圧力に耐えきれず自殺した。洪子誠は、「数ヶ月後、状況にあのような逆転が生じると、彼は思いもしなかった。その時になれば、彼と李希凡がこのときに批判された観点は真理となるのであった」、陳其通ら4人の「誤り」は「時機」の選択が誤っていたのであり、「これらの見方を夏になってから発表していれば、暗黒面の暴露を非難する問題のうえで、まだ手ぬるいと思な

されたであろう」と言う<sup>(68)</sup>。

そして1957年下半年には「逆流」、「毒草」と非難された作品は、20余年後、変化した政治・文学環境の中で、今度は正反対の評価を与えられ、「重放的鮮花」〔再び咲いた花〕といわれた。1979年、これらの作品が、『重放的鮮花』という書名の一冊の本にまとめられ、上海文芸出版社から出版されたのである。その作者もまた、受難の後に復活した「文化の英雄」と見なされた。このことについても洪子誠は、「毒草」と「鮮花」とはまったく正反対の評価であるが、批評者の理論的根拠と評価の視点はかなり一致している、と言う<sup>(69)</sup>。これは登場人物のような官僚主義者はいるかどうか、新社会を称えているかどうかなどが、いずれの場合においても作品の評価基準になっているという意味である。

政治指導者は、政治闘争の必要のために自らの歴史と現実についての判断を絶えず変更する。韋君宜の生きた時代には、不断に変化する「政治的必要に服従するという要求は絶対的なもの」<sup>(70)</sup>なのであった。

## おわりに

---

反右派闘争で、作家協会は、合計わずか200人にすぎないのに、50余人が右派にされた。「境界線上」の者は含まずに、である。『文芸学習』では7人の編集委員のうち、3人が右派となった<sup>(71)</sup>。当時『人民文学』評論組にいた塗光群は、「私の印象では、作家協会の雑誌のうち、たとえば『文芸報』『人民文学』『新観察』で右派と認定された者の数は、単位の全人員中ほぼ4分の1から5分の1を占めるところがあり、毛主席がいった約5パーセントを大幅に超過していた。おそらくは全国で右派の比率が最高の単位であった。これに対して、『文芸学習』の右派の比率は最小で、韋君宜、黄秋耘がトップにあったことと無関係ではないだろう」と言う<sup>(72)</sup>。

韋君宜は『思痛録』の中で、自分も一切の問題をすべて黄秋耘の所為に転嫁していたなら、もっと軽い処分ですむことがわかっていた、と述べている、しかし、その時、韋君宜の心中の苦痛は最大限にまで達していた。韋君宜は若いころから革命に参加することを志し、旧世界を変革しようと志してきたのであったが、まさかこんなことのためにではあるまい？ 人格を売り渡してまで、自分の「難関」を切り抜けるのか？ もしもそうなら、ここでわずかばかりの屈辱的な施しをうける必要がどこにある？ なぜ両親の言うことを聞いて米国に留学し、米国籍中国人学者にならなかったのか？ 韋君宜は革命に参加した後で、さらにまだ正直な人間であろうとすることかどうかの選択を迫られたのである。韋君宜は自分個人の運命を悲しむよりも、はるかに深くこの「革命」に心を痛めた。そして悲しみ

失望すると同時に、そんなことはしない、同罪となっても、友人を裏切るようなまねは絶対にしないと決心したという<sup>(73)</sup>。こうして韋君宜は、身近な所で力の限り黄秋耘を弁護し、部下を庇って作家協会の実権派と激しく闘争したのだった。

韋君宜は方懐というペンネームで「従『馬路天使』引起的問題」を『文芸学習』1957年第5期に発表している。この文章もまた本刊編集部の「徹底糾正我們的右傾思想」中で、文芸思想上の右傾のため、青年知識分子の思想状況について正しい判断ができず、青年の思想状況について正当な憂慮を抱き正しく判断した人に対して理由のないものと考えたと批判されているのだが、本誌主編の韋君宜の書いた「従馬路天使引起的問題」がこの種の観点を表していると記されていて、初めて方懐が韋君宜とわかるのである。

本文は、青年工作と教育工作に携わっている多くの同志が、多くの青年が映画『馬路天使』〔街角の天使、1937年〕を見に行く現象を憂え、青年が毒素に染まることを恐れ、『馬路天使』を上映禁止にすべきだと言う者さえ現れたことについて、反対意見を述べたものである。

韋君宜は、3年前、青年がソ連の英雄を描いた小説しか読まない状況下でも、『鋼鉄はいかに鍛えられたか』を読んで恋愛にしか興味を持たない者もいた、このようなことは避けられないものだ、それではいったいどんな作品を読ませるのか、若者のものの見方が間違っていれば、手伝ってやればよいではないか、と述べた後で、次のように続けている。

接吻シーンやラブソングに興味を持つのは、何もそんなに悪いことではない。われわれ共産主義者は中世の禁欲を主張する清教徒ではない。青年にどうして共産主義の道德規則でもないものを押し付けようとするのか。彼らに愛情のことを考えさせないのか。青年を缶の中に密封しようとして、良い芸術作品の中で、少しの愛情に触れることも許さない。それでは、いったん缶が破られたとき（必ず破られる。青年は、道を守る君子の保護のもとで一生生活してゆくことはできない）、長く抑圧されていたものは氾濫する。溺れてしまい、真に不健康なものを歓迎し、收拾がつかなくなってしまうだろう。

「双百」政策は間もなく始まってから1年だが、「何を鳴できるか、何を放できるか」について、まだ討論している。「鳴」と「放」を阻む障害は社会の各方面から来る。ある同志は、青年は『卓婭和舒拉的故事』、『古麗雅的道路』〔エレーナ・イリイナ『ゲーリヤの道』〕さえ読んでいればよいと考える。だから青年が『馬路天使』、『流浪者』〔インド映画、1954年〕、『勇士的奇遇』〔フランス映画『花咲ける騎士道』（原題：Fanfan la Tulipe）、1952年〕、三言二拍、『紅樓夢』などの違った趣のものを見て、さらには「組

織部」「在懸崖上」を見て興味を持たば慌てだす。何か汚らしいものが青年の頭を侵すのではないかと心配する。

上述の今流行っている作品は本当に良い作品だとみなせる。決して下劣な作品ではなく、下劣な感情を人に与えるものではない。これらの作品の流行にそんなに心配する必要はない。

社会主義建設において勇猛果敢に前進している新青年には戦闘的感情が充満しているのは当然のことであり、少しも間違っていない。しかしこのような新青年が永遠に悲哀も苦痛も失望もなく、永遠に水晶のように透明な生活を過ごすのは不可能である。そのような感情を含んだ作品に永遠に触れさせないのはいけない。それらの感情は、一日中心を占領しているわけではなく、青年の前進にとって大きな害はない。仮に完全にそのような感情がなかったとしても、他人のそのような感情を理解するのは悪いことではない。われわれは人と団結しなければならないのではないか。人の心さえまったく理解できずに、どんな人と団結するのか。

青年が見たがるものは、できるだけ多く見せ、考えてみさせよう、話してみてもよい、それは悪いことではない。真理は常に誤謬に打ち勝つ。マルクス主義が公に宣伝することが許されなかった時代に、多くの青年はそれでも幾重もの雲霧をかき分けてマルクス主義の真理を探し当てた。それなのになぜ、今まっすぐな大きな道が目の前に敷かれているときに、われわれは青年が道を探し当てられないと心配することがあるだろう。〔要約〕

韋君宜は、3年前は青年がソ連の英雄を描いた小説しか読まなかったと書いている。『文芸学習』はちょうどそのころに創刊され、韋君宜は当代文学から中外の古典まで網羅した、青年向け文芸普及雑誌を出版してきたのだった。韋君宜は、当初、文芸の教育的意義と社会的効果を強調し、「徹頭徹尾、教条主義者だった」と、黄秋耘は述べていたが、「従『馬路天使』引起的問題」には、その片鱗も見えない。ここにいるのは、大いに「鳴放」して、実事求是のやり方で討論をたたかわそう、相反する意見を抑えつけ、否定してしまうのではなく、自ら独立して思考し、納得できる結論を導き出そうとする、当時のいわゆる「修正主義的傾向」、「右傾」の韋君宜である。当時は、批判大会で正論をはいて、黄秋耘や李興華らの部下を庇うことさえ「右傾」と言われた。黄秋耘の言うように、韋君宜にとって、フルシチョフの秘密報告を聞いたことが「教条主義者」から脱却する契機となったとするなら、韋君宜は、『文芸学習』の編集を通して、単純かつ一面的に作品や生活を見ることなく、相反する意見の前で、自ら独立して思考し、是非を明らかにしてゆく訓練を積んだ

といえるだろう。

韋君宜は、『思痛録』で次のように回想している<sup>(74)</sup>——1957年には言論が一定の枠を越えたために、私も厳しい批判を受けた。このとき夫婦として彼〔楊述〕は私に同情し、私の苦悩が極点にまで達したとき私に付き添って散歩に出かけたことがあった。けれども散歩中にほとんど何も話すことはなかった。私は当時こう思っていた。私たちはおそらくもう心を通わすことはできないだろう、と。彼が心配していたのは私が処分を受けることであり、恐れていたのは私の思想が党に対して揺らぐことであった。私が考えていたのは、心配しなければならないのは私のことではない、悲しむべきことは勇気を持って発言した人がこんなにも大量に迫害されては、国家の前途はどうなるのであろうか、ということだった。彼は、党が反右派闘争の発動を決定した以上、間違いであるはずがない、間違っているのはごく少数の人で、正確に把握していないだけだ、と考えていた。私の方は、批判大会の席でのあのような類の発言に本当の話などほとんどいくらないと感じていた。これはごく少数の人のことであるだけではなかった。私たちの間の距離はあつという間に縮めることが困難になってしまったが、それでも彼は依然として私に忠実であったし、なんとか私を喜ばせようとしてくれた。

「革命」に心を痛め、「国家の前途」を思う韋君宜が、「われわれの世代が成したことのすべて、犠牲にしたもの、得たもの、失ったもののすべて」について思索、探索し、同じ誤りを繰り返さないために執筆し、12冊もの著書として出版するのは、それから20余年後の1980年以降、60歳をとうにこえてからのことであった<sup>(75)</sup>。

## 註

- (1) 「億『文芸学習』」、韋君宜『海上繁華夢』（人民文学出版社、1991年8月）所収、44、46、48頁。
- (2) 本文中では、（ ）内は引用文の原注、〔 〕内は筆者の注とする。
- (3) 『中国大百科全書・中国文学Ⅱ』（中国大百科全書出版社、1988年9月第2版）。
- (4) 『文芸学習』創刊号所収の「発刊詞」の言葉。
- (5) 黄偉経「文学路上六十年——老作家黄秋耘訪談録（下）」、『新文学史料』1998年第2期所収、65頁。
- (6) 黄秋耘『風雨年華』増訂本（人民文学出版社、1988年5月）、163、181頁。なお『風雨年華』北京第1版（人民文学出版社、1983年10月）は全161頁で、1935年から1954年までについて述べた第21章までしか収録されていない。『風雨年華』増訂本は全300頁で、北京第1版に12章8万字が追加され、1976年までについて述べた第33章まで収録されている。しかし牧惠によれば、この『風雨年華』増訂本も黄秋耘の原作から1万余字を削除したものという（牧惠『且閑齋雜俎』、漢語大詞典出版社、1998年、16頁）。黄秋耘の牧惠宛1988年10月31日付

手紙からは、本書増訂本の削除は23箇所だったことが知られる（黄秋耘『黄秋耘書信集』、花城出版社、2004年、175頁）。

- (7) 涂光群『五十年文壇親歴記』（遼寧教育出版社、2005年）、687頁。
- (8) 新華社福建分社「社長代理」は、「黄秋耘同志生平簡介」（『新文学史料』2002年第1期所収、90頁）、廣野行雄「黄秋耘インタビューに見る反右派闘争—沈黙に甘んじようとした人々—」（『駿河台大学論叢』第32号（2006年）所収、23頁）他による。黄秋耘、前掲書第24章では、「社長」と記されている。
- (9) 「憶『文芸学習』」、前掲書、44-48頁を要約。
- (10) 「組織部新来的年輕人」は、韋君宜の原文による。この作品が、『人民文学』1956年9月号に掲載されたときの題名は「組織部新来的青年人」で、当時は「組織部新来的青年人」と称されていた。これは『人民文学』常務副主編の秦兆陽が修正したもので、王蒙の書いた本来の題名は「組織部来了個年輕人」。秦兆陽の修正は毛沢東に批判され、1957年5月9日『人民日報』に、『人民文学』編集部は「組織部新来的青年人」を発表する際、あわせて29箇所にもおよぶ大幅な修正を加えたことが発表された（『人民文学』編集部整理「『人民文学』編集部対「組織部新来的青年人」原稿の修改情況」）。小説の「修正」箇所については、辻田正雄「王蒙試論——『組織部に若者がやって来た』の改删を中心に——」（『未名』創刊号、1982年）、與小田隆一「王蒙『組織部新来的青年人』について——その執筆意図と文学史評價との乖離をめぐって——」（『中国文学論集』第16号、1987年）参照。

この作品は『1956年短編小説選』（人民文学出版社、1957年）に収録される際、王蒙自身による再修正がおこなわれ、題名も元の「組織部来了個年輕人」に戻され、その後『王蒙文存』第11卷（人民文学出版社、2003年）にもこの「組織部来了個年輕人」が収録されている。ただし、『重放的鮮花』（上海文芸出版社、1979年）には、『人民文学』に掲載された「組織部新来的青年人」が収録されている。『重放的鮮花』については、本書143頁参照。洪子誠『1956：百花時代』（山東教育出版社、1998年）、114-118頁。涂光群、前掲書、439、525-526頁。黎之「回憶与思考——1957年紀事」、『新文学史料』1999年第3期所収、135-136頁。

- (11) 黄秋耘、前掲書、163頁。
- (12) 韋君宜『思痛録』北京版（北京十月文芸出版社、1998年5月、全199頁）、185頁。『思痛録』香港版（香港天地出版公司、2000年、全233頁）、191頁。
- (13) 「心中的楷模——参加邵荃麟同志追悼会归来」、韋君宜『似水流年』（湖南人民出版社、1981年8月）所収、124-125頁。
- (14) 中国新民主主義青年団中央宣伝部副部長兼団中央機関誌『中国青年』総編集時代の韋君宜の「功利主義」については、盛禹九が「一個大写的人——懷念韋君宜」（『韋君宜紀念集』、人民文学出版社、2003年所収、144-145頁）の中で次のように記している。

1950年の初夏、中央団校を卒業して『中国青年』の編集部で工作するようになった盛禹九に、韋君宜はこう言ったという——雑誌『中国青年』は青年団の機関誌であり、広範な青年読者のためのものである。それは時代にぴったりとつき従い、当面の中央の思想宣伝と関係する政策について理解し、青年大衆の思想傾向と問題について理解し研究しなければならない。この「両方」の状況を明らかにして、はじめて何を宣伝し、何を提唱し、何に反対しなければならないかが決まる。こうして書いたものがはじめて人に読んでもらえ、社会的効果をあげることができる。

- (15) 馮雪峰のこの発言に、韋君宜はたちまち恐れおののいた。会議が終わってから、邵荃麟

同志は韋君宜を慰めて、「大丈夫だ。彼はあんな気性なんだ。しばらくしてから一度彼の家に行って、雑誌はいったいどのように編集すべきでしょうか、と丁寧にたずねなさい。人の意見を多く聞けば良いのだよ」と言ったという。

- (16) 「追念雪峰同志」、『海上繁華夢』所収、182頁。
- (17) 黄偉経「文学路上六十年——老作家黄秋耘訪談録(上)」、『新文学史料』1998年第1期所収、137頁。
- (18) 黄秋耘、前掲書、163頁。黄偉経、前掲文(下)、66-67頁。
- (19) 黄秋耘、前掲書、178頁。黄偉経、前掲文(下)、67-68頁。韋君宜は『思痛録』北京版40頁で、フルシチョフの秘密報告が伝達されるのを、北京市委員会と作家協会で2回聞き、討論にも参加した、大きな衝撃を受けた、と記している。また、韋君宜は『思痛録』香港版45頁でのみ、フルシチョフの秘密報告こそ、まさに毛沢東が「大鳴大放」を発動した原因だと考える、と記している。
- (20) 『文芸報』1957年第7号(5月19日出版)に掲載された「小統計」によれば、このとき中国作家協会会員は707人。郭小蕙整理「郭小川日記(1957・上・中・下)」、『新文学史料』1999年第2・3・4期所収の4月27日の所に、「中国作家協会会員707人、そのうち党員は441人、62%強を占める」と記されている。
- (21) 黄秋耘、前掲書、164頁。
- (22) 黄偉経、前掲文(下)、68頁。
- (23) 黄秋耘、前掲書、164頁。
- (24) 黄偉経、前掲文(下)、68-69頁。
- (25) 韋君宜『思痛録』北京版、40頁。
- (26) 戚学毅の事件については、黄偉経、前掲文(下)、69頁と王培元『在朝内166号与先輩魂 靈相遇』(人民文学出版社、2007年1月)、126頁による。
- (27) 丸山昇『文化大革命に到る道』(岩波書店、2001年)、334頁。
- (28) 韋君宜「憶『文芸学習』」、前掲書、46頁。
- (29) 『文芸学習』1957年第2、3期「編者の話」。『文芸学習』の「關於『组织部新来的青年人』的討論」欄に掲載された文章は、以下のとおりである。
- 1956年第12期(12月8日出版)：林穎「生活的激流在奔騰」/增輝「一編嚴重歪曲現實的小說」/王踐「清規戒律何其多?」/王恩「林震值得同情嗎?」/王冬青「生動地揭露了新式官僚主義者的嘴臉」/李濱「真實呢、還是不真實?」/唐定国「林震是我們的榜樣」
- 1957年第1期(1月8日出版)：長之「可喜的作品，同時是有嚴重缺點的作品」/彭慧「我對『组织部新来的青年人』的意見」/戴宏森「一個区委幹部的意見」/劉紹棠、從維熙「寫真實——社會主義現實主義的生命核心」/一良「不健康的傾向」/趙堅「傷了花瓣的花朵」/邵燕祥「去病和苦口」
- 1957年第2期(2月8日出版)：杜黎均「作品中的真實問題」/王培萱「一編有特色的小說」/江國會「要實事求是地分析作品」/艾克恩「林震究竟向娜斯嘉學到了些什麼?」/馬寒冰「準確地去表現我們時代的人物」/鄧嘯林「林震及其他」
- 1957年第3期(3月8日出版)：秦兆陽「達到的和沒有達到的」/唐摯〔唐達成〕「談劉世吾性格及其它」/劉賓雁「道是無情却有情」/康濯「一編充滿矛盾的小說」/艾蕪「讀了『组织部新来的青年人』的感想」
- (30) 黎之、前掲文、123-125頁。黎之『文壇風雲錄』(河北人民出版社、1998年12月)の「前言」

- と「著者紹介」によれば、黎之は1928年生まれ、当時は中共中央宣伝部文芸処で工作、長期にわたり中央宣伝部で工作し、文芸方面の重大問題の討論には直接かかわってきた、という。
- (31) 馬寒氷のこの小説に対する批判とは「正確地去表現我們時代的人物」で、「組織部」は、人を満足させる作品ではない、真実ではない作品と考えざるを得ない、またわれわれの時代の人物をあまり正確には表現していない作品である、と批判している。
- (32) 黎之、前掲文、134-135頁。
- (33) 李希凡のこの小説に対する批判とは、『文匯報』1957年2月9日に掲載された「評『組織部新来的青年人』」のこと。陳文新主編『中国文学編年史・当代卷』（湖南人民出版社、2006年）、87-88頁。王蒙「我看毛沢東」、『王蒙文存』第20卷所収、55頁。洪子誠、前掲書、113-114頁。藍翎『竜巻風』（上海遠東出版社、1995年）、73頁。
- (34) 周尊攘「我敬愛的上級」、『韋君宜紀念集』所収、304頁。周尊攘は、1956年夏、中国人民志願軍から転業して『文芸学習』編集部に來た。この伝達をおこなったのは、中国作家協会秘書長の郭小川で、場所は中国文連礼堂だったと言う。邵荃麟だけではなく、郭小川も伝達をしたのかもしれない。伝達の内容は、本文中に引用した部分以外は、ほぼ黎之の記述と同じであるが、周尊攘は、香花と毒草について、毛沢東はこう考えていたという——香花だけを咲かせ、毒草をはやさないことは可能か？ 不可能である。香花はこれまで毒草との闘争の中で成長してきたのである。
- (35) 黎之、前掲文、124-125、134-135頁。丸山昇、前掲書、304-305頁。
- (36) 洪子誠、前掲書、114頁。
- (37) 王蒙「我看毛沢東」、前掲書、56頁。
- (38) 黎之、前掲文、124、137頁。丸山昇、前掲書、298-303頁。
- (39) 王蒙「我看毛沢東」、前掲書、55頁。
- (40) 黎之『文壇風雲録』、70-71頁。
- (41) 洪子誠、前掲書、131頁。
- (42) 洪子誠、前掲書、131-134頁。
- (43) 黄秋耘、前掲書、175-177、180頁。
- (44) この文章のみ涂光群、前掲書、139頁による。本書によれば、宋雲彬、黄源、陳学昭ら、この座談会に参加した人びとは、ほぼ全員が間もなく右派とされた。
- (45) 洪子誠、前掲書、94頁。
- (46) 洪子誠、前掲書、99-100頁。
- (47) 韋君宜は『文芸報』1957年第1号（4月14日出版）に「珍惜我們的階級感情」を發表している。
- (48) 洪子誠と笑雨の挙げた7編の他に、当時、黄秋耘は、杜方明「観人与論文」（『文芸学習』1956年第12期（12月8日出版）掲載）と秋耘「春風未緑珠江岸」（1957年5月中旬）（『文芸報』1957年第10号（6月9日出版）掲載）の2編も發表している。「從『分子和分母』説起」と「春風未緑珠江岸」を除いて、他の文章は文革後に出版された、たとえば『鏽損了靈魂的悲劇』（人民文学出版社、1980年）や『黄秋耘文学評論選』（湖南人民出版社、1983年）に収録されている。「啓示」は初出誌不明、文末に「1956年10月」と記されている。「從『分子和分母』説起」は『文芸学習』1957年第6期に掲載されているが、筆者の名は汪補拙。
- (49) 黄秋耘、前掲書、184頁。なお、「郭小川日記」1957年12月30日にも、「大樓に行くと、右派分子を処理する会を開催中、黄秋耘が右派分子とされなかったことに対するみなりの不満

多数」と記されている。

- (50) 黄偉経、前掲文(上)、122頁で、黄秋耘は、『文芸報』1958年第1号(1月11日出版)が10数日早く出版されたと言っていることから、『文芸報』1957年第13号(6月30日出版)も、6月29日に見ることができたのではないかと考える。
- (51) 黄偉経、前掲文(上)、119-120頁。
- (52) 涂光群、前掲書、448頁。
- (53) 黄偉経、前掲文(上)、127頁、前掲文(下)、70-71頁。
- (54) 王培元、前掲書、125頁。韋君宜『思痛録』北京版、187頁。
- (55) 韋君宜「憶『文芸学習』」、前掲書、48頁。
- (56) 「貫徹党的文芸路線 批判修正主義思想 作家協会大整大改」(『人民日報』1957年11月12日)。
- (57) 韋君宜『思痛録』北京版、42-43頁。黄偉経、前掲文(上)、120頁。胡喬木は、韋君宜が延安で『中国青年』の編集者をしていたとき、『中国青年』総編集・中国青年社社長。韋君宜の経歴については、拙稿「韋君宜年譜」、『吉田富夫先生退休記念中国学論集』(汲古書院、2008年)所収参照。
- (58) 韋君宜『前進的脚跡』「後記」(中国青年出版社、1955年10月)。
- (59) 韋君宜『思痛録』北京版、44-45頁。
- (60) 黄偉経、前掲文(上)、121-122頁、前掲文(下)、72頁。
- (61) 洪子誠、前掲書、105頁。洪子誠は前掲書、104-105頁で、黄秋耘の「批判我自己」を次のようにまとめている——彼はもう「教条主義」が生む、逃れ難い束縛を強調せず、「真に修養を積み、豊富な生活経験を持つ作家は教条主義に簡単に束縛されることはない」と認めた。彼はもう現実の困難と苦しみを正視せよという「否定的精神」を主張せず、自分を資産階級と小資産階級の知識分子として、「古いものを取り除くのに勇敢で、新しいものを広めるのに怠惰、破壊が得意で、建設が下手、小さいもの近いものに執着し、大きなもの遠くにあるものを忘れた」と自己批判した。彼はもう教条主義とセクト主義の「寒流」が全国にきわめて恐ろしい雰囲気を生み出しているとは考えず、「当面において、右の傾向はつまるところ『左』の傾向よりもずっと危険」、「修正主義と資産階級の文芸思想はすでに全国に汎濫している」と考えた。文芸界の闘争が「無原則の紛糾」であり、「混迷と強暴」だとは非難せず、自分の軟弱厭戦の「許しがたい誤り」を自己批判し、「この数年来、文芸界が進めてきたこれらの思想闘争は、文芸界の党の路線と反党の路線との闘争であり、文芸界の社会主義思想と資産階級思想との闘争である」ことを承認した。
- (62) 韋君宜『思痛録』北京版、51、63、187頁。王培元、前掲書、127頁。
- (63) 黄秋耘、前掲書、186、195頁。黄偉経、前掲文(下)、94頁。涂光群、前掲書、448頁。
- (64) 韋君宜『思痛録』北京版、41-42、45頁。洪子誠、前掲書、232頁。
- (65) 洪子誠『中国当代文学史(修訂版)』(北京大学出版社、2007年)、22頁。
- (66) 丁玲『丁玲自伝 中国革命を生きた女性作家の回想』(田畑佐和子訳、東方書店、2004年)、322、336頁。
- (67) 洪子誠『中国当代文学史(修訂版)』、25頁。
- (68) 洪子誠『1956：百花時代』、97-98、114頁。
- (69) 洪子誠『1956：百花時代』、93頁、『中国当代文学史(修訂版)』、128-129頁。
- (70) 銭理群『返観与重構——文学史的研究与写作』(上海教育出版社、2000年)78-79頁。

- (71) 韋君宜『思痛録』北京版、42頁。韋君宜「憶『文芸学習』」、前掲書、46頁。
- (72) 涂光群、前掲書、448、688頁。
- (73) 韋君宜『思痛録』北京版、51頁。
- (74) 韋君宜『思痛録』北京版、121頁。
- (75) 1980年以降に出版された韋君宜の12冊の著書については、拙論「韋君宜の著作における『歴史』の意味について」、森時彦編『20世紀中国の社会システム』（京都大学人文科学研究所、2009年）所収参照。

本稿は、日本学術振興会平成20・21年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）「韋君宜から見た中国革命史再構築の試み——作家、編集者、革命家の視点から（課題番号：19520317）」）の交付を受けておこなった研究成果の一部である。